

北陸自動車道関係遺跡調査報告書

第 11 集

曾 万 布 遺 跡

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

北陸自動車道関係遺跡調査報告書

第11集

曾万布遺跡

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本報告は、福井県教育委員会が日本道路公団金沢建設局の委託を受けて、1972・73年（昭和47・48年）に実施した、北陸自動車道建設に伴う曽万布遺跡の発掘調査報告書です。

近年のめまぐるしい社会の変動と急激な地域開発は、多くの問題を内包しております。しかし、真に豊かな社会の未来像は、歴史を学び取り、良き伝統を継承する中からこそ、描き出されるべきものといえましょう。

本書は、学術資料としては、決して十分なものとは申せません。それでも、この報告を通して、皆様方の郷土の歴史に対する関心をより一層深めることができ、ひいては文化財保護に対する一助ともなりえるならば、望外の喜びとするものであります。

最後に、調査にあたって、種々ご協力頂いた地元の方々を初め、その他関係者各位、諸機関のご援助に対して、厚くお礼申し上げます。

平成20年7月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、北陸自動車道建設に伴い、福井県教育委員会が日本道路公団金沢建設局から委託を受けて実施した、福井市曾万布遺跡における発掘調査報告書である。
2. 発掘調査、遺物整理ならびに報告書作成にあたっては、主に木下召乙・青木豊昭・仁科 章・山口 充・中司照世（以上福井県教育庁文化課文化財調査員）が中心となり、木下哲夫・松井政信・高嶋敬治郎・奥谷清隆（以上調査補助員）の諸氏の協力を得て行った。
3. 本書の作成にあたっては、
第Ⅰ章第1節……………仁科 章
第Ⅱ章第1節、第Ⅲ章第2節1、第Ⅳ章第2節1（縄紋土器）……………木下哲夫
第Ⅳ章第2節1（石製品・土製品）……………松井政信
が、その他を中司が、それぞれ分担・執事した。なお、古墳時代の土師器写真については、牛嶋 茂氏（平安京遺跡調査会）に撮影をお願いした。
4. 本書の編集は中司があたった。発掘調査から報告書作成に至るまでの間、多数の方々から種々のご協力やご援助を頂いた。本書の冒頭にそれらの代表の方々の名を記すとともに、ご助力頂いた方々に、深く感謝したい。
〔個人〕稲垣登喜夫・稲垣紀一・梅川光隆・置田雅昭・梶 幸夫・堅田 直・斎藤 優・水藤 真・田嶋明人・田辺昭三・西川博孝・増田進治・三浦 静・本村豪章・安田喜憲・谷内尾晋司・吉岡康暢・六角大壤（以上50音順、敬称略）
〔機関〕元興寺仏教民俗資料研究所・帝塚山大学考古学研究所・東京国立博物館・日本道路公団金沢建設局・福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所・平安京調査会・前田建設工業株式会社

この報告書は、本来ならば昭和51年度に刊行する予定でしたが、諸般の事情により遅延し、今日に至りました。

なお、報告書の原稿は、既に執筆されている部分もあることから、混乱を避けるため当時の内容で執筆を進めました。そのため、現在の見解と一致しない部分があります。

本文目次

	頁
第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 予備調査	2
第3節 本調査	5
1 発掘区の設定	5
2 調査の経過	5
3 調査の概要	7
4 調査体制	7
5 調査日誌	8
6 遺物整理体制	10
第Ⅱ章 曾万布遺跡と周辺の歴史的環境	11
第1節 縄文時代	11
第2節 弥生時代	13
第3節 古墳時代	14
第4節 奈良～室町時代	17
第Ⅲ章 遺 跡	20
第1節 遺跡序説	20
第2節 遺跡各説	21
1 縄文時代	21
2 古墳時代	27
3 平安時代	37
4 室町時代	39
第Ⅳ章 遺 物	63
第1節 遺物序説	63
第2節 遺物各説	63
1 縄文時代	63
2 古墳時代	84
3 平安時代	115
4 室町時代	116

図版目次

	本文対照頁
図版第1 遺 跡 (1) 成願寺山上より見た曾万布遺跡遠景	1
(2) 北方より見た曾万布遺跡調査区全景	6・9
図版第2 曾万布遺跡周辺地区航空写真	6・9
図版第3 曾万布遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	1
図版第4 15 E 区(縄文時代) (1) 東方より見た土器の出土状態(第1次調査)	5

	(2) 西方より見た土器の出土状態 (第1次調査) ……………	5
図版第5	14 F・15 E区 (縄文時代)	(1) 南方より見た14 F区における土器の出土状態 ……………21 (2) 北方より見た15 E区における土器の出土状態 ……………21
図版第6	1～5号遺構 (縄文時代)	(1) 西方より見た1～5号遺構 ……………21 (2) 北方より見た1号遺構における遺物の出土状態 ……………22・23
図版第7	1号遺構 (縄文時代)	(1) 北方より見た打製石斧の出土状態 ……………23 (2) 北方より見た遺物取り上げ後の状態 ……………22
図版第8	2・3号遺構 (縄文時代)	(1) 西方より見た2号遺構における遺物の出土状態 ……………23・24 (2) 北方より見た3号遺構 ……………24
図版第9	4・5号遺構 (縄文時代)	(1) 北方より見た4号遺構 ……………24 (2) 北方より見た5号遺構 ……………25
図版第10	6・7号遺構 (縄文時代)	(1) 南方より見た6号遺構 ……………26 (2) 西方より見た7号遺構における遺物の出土状態 ……………26
図版第11	竪穴住居 (古墳時代)	(1) 南方より見た全景 ……………27・28 (2) 南方より見た南西部における土器の出土状態 ……………27・28
図版第12	大溝1 (古墳時代)	(1) 東方より見た全景 ……………27～30 (2) 西方より見た全景 ……………27～30
図版第13	大溝2 (古墳時代)	(1) 西方より見た土器・流木の出土状態 ……………29 (2) 東方より見た土器・木器の出土状態 ……………29
図版第14	河道1 (古墳時代)	(1) 南方より見た石積・木組両遺構の出土状態 ……………31・33 (2) 南方より見た木組遺構の出土状態 ……………31・33
図版第15	河道2 (古墳時代)	(1) 西方より見た木組遺構の出土状態 ……………33 (2) 北方より見た木組遺構下出土の編物 ……………34
図版第16	河道3 (古墳時代)	(1) 北方より見た木組遺構除去後の全景 ……………30～33 (2) 東方より見た石積遺構と杭列 ……………33
図版第17	低湿地・窪地 (古墳時代)	(1) 低湿地における礫の出土状態 ……………35 (2) 西方より見た窪地全景 ……………35・36
図版第18	1・2号溝 (平安時代)	(1) 北方より見た状態 ……………37 (2) 東方より見た状態 ……………37
図版第19	I・II号遺構群 (室町時代)	(1) 東方より見たI号遺構群 ……………39・40 (2) 北方より見たII号遺構群 ……………40～42
図版第20	II号遺構群 (室町時代)	(1) 西方より見た2・3号土壇 ……………42 (2) 西方より見た38号土壇 ……………43
図版第21	III号遺構群 (室町時代)	(1) 北方より見た全景 ……………43・44

代)	(2) 北方より見た4号建物P ₆ の埋土上面 ……………	43・44
	(3) 北方より見た4号建物P ₁ の埋土上面 ……………	43・44
	(4) 西方より見た4号建物P ₆ の埋土断面 ……………	43・44
	(5) 西方より見た4号建物P ₈ の埋土断面 ……………	43・44
図版第22 4号土壙・V号遺構 群ほか(室町時代)	(1) 南方より見た4号土壙の土層断面 ……………	44
	(2) 北方より見たV号遺構群と4号溝 ……………	45～47
図版第23 V号遺構群(室町時 代)	(1) 北方より見たV号遺構群部分……………	45・46
	(2) 西方より見た6号土壙 ……………	45・46
図版第24 7・8号土壙(室町 時代)	(1) 西方より見た7号土壙……………	46・47
	(2) 北方より見た8号土壙 ……………	48
図版第25 9号土壙(室町時代)	(1) 北方より見た状態……………	48・49
	(2) 北方より見た井側全形……………	48・49
図版第26 10・11号土壙(室町 時代)	(1) 南方より見た10号土壙における遺物の出土状態 ……	48～50
	(2) 西方より見た11号土壙における漆器碗の出土状態 ……	50
	(3) 東方より見た11号土壙における曲物容器・土師質 土器小皿の出土状態……………	50
図版第27 VII・IX号遺構群(室 町時代)	(1) 東方より見た11号土壙 ……………	50
	(2) 西方より見た12号土壙 ……………	50
	(3) 北方より見たIX号遺構群……………	50～60
図版第28 IX号遺構群(室町時 時代)	(1) 東方より見たIX号遺構群南部……………	51～54
	(2) 北方より見た13号土壙 ……………	52
	(3) 北方より見た14号土壙 ……………	52・53
図版第29 15～17号土壙(室町 時代)	(1) 東方より見た15号土壙における遺物の出土状態 ……	52・53
	(2) 南方より見た15号土壙における遺物取り上げ後の 状態……………	52・53
	(3) 北方より見た16・17号土壙 ……………	53・54
	(4) 北方より見た16号土壙における柄杓の出土状態 ……	53
図版第30 18・19号土壙(室町 時代)	(1) 北方より見た18号土壙における遺物の出土状態 ……	54
	(2) 北方より見た19号土壙における遺物の出土状態 ……	54・55
	(3) 西方より見た19号土壙 ……………	54・55
図版第31 20～22号土壙(室町 時代)	(1) 北方より見た20号土壙 ……………	55
	(2) 北方より見た21号土壙 ……………	55・56
	(3) 西方より見た22号土壙における漆器蓋の出土状態 ……………	55・56

	(4) 東方より見た22号土壙における漆器碗の出土状態	55・56
	(5) 東方より見た22号土壙における漆器碗・庖丁の出土状態	55・56
図版第32	23・25号土壙（室町時代）	(1) 北方より見た23号土壙における遺物の出土状態 56 (2) 北方より見た25号土壙 57
図版第33	26・28号土壙（室町時代）	(1) 北方より見た26号土壙 57・58 (2) 南方より見た28号土壙における遺物の出土状態 58
図版第34	29・30号土壙（室町時代）	(1) 西方より見た29号土壙 58・59 (2) 西方より見た30号土壙における遺物の出土状態 59
図版第35	31・32号土壙（室町時代）	(1) 北方より見た31号土壙 59 (2) 北方より見た32号土壙における遺物の出土状態 59・60 (3) 西方より見た32号土壙における遺物取り上げ後の状態 59・60
図版第36	33号土壙・11号溝（室町時代）	(1) 北方より見た33号土壙における遺物の出土状態 59・60 (2) 東方より見た33号土壙における遺物取り上げ後の状態 59・60 (3) 西方より見た11号溝 51・52
図版第37	34・35号土壙（室町時代）	(1) 南方より見た34号土壙における遺物の出土状態 61 (2) 北方より見た34号土壙における遺物の出土状態 61 (3) 北方より見た35号土壙 61
図版第38	土器（縄文時代）	63～76
図版第39	石器（縄文時代）	77～82
図版第40	土師器1（古墳時代）	84
図版第41	土師器2（古墳時代）	86・87・91
図版第42	土師器3（古墳時代）	86～91
図版第43	土師器4（古墳時代）	89～92、95～98、100
図版第44	木器1（古墳時代）	101～105、108～110
図版第45	木器2（古墳時代）	102～108
図版第46	木器3（古墳時代）	105～108
図版第47	土師質土器・陶器・土製品（室町時代）	116～121
図版第48	陶磁器（室町時代）	117～120
図版第49	木器1（室町時代）	121～123、127
図版第50	木器2（室町時代）	122～126、128

図版第51 木器3（室町時代）	122～126
図版第52 木器4（室町時代）	121・122、124～127
図版第53 石製品（室町時代）	128～131
図版第54 陶器・木器・金属器（室町時代）	119・122・125・131・132

挿 図 目 次

	頁
第1図 福井平野東部の北陸自動車道関係主要調査遺跡位置図	1
第2図 予備調査区位置図	3
第3図 調査区割りと予備・第1次調査区	5
第4図 福井市天神遺跡出土土器実測図	12
第5図 福井平野東部遺跡分布図	12・13
第6図 福井市下中遺跡出土土器実測図	13
第7図 福井市原目山古墳群分布図	15
第8図 全遺構分布図	20
第9図 縄文時代遺構分布図	21
第10図 1号遺構上面遺物出土状態実測図	21
第11図 1号遺構実測図	22
第12図 2号遺構上面遺物出土状態実測図	23
第13図 2号遺構実測図	23
第14図 3号遺構実測図	24
第15図 4号遺構実測図	24
第16図 6号遺構実測図	25
第17図 7号遺構実測図	26
第18図 竪穴住居実測図	28
第19図 大溝北部実測図	29
第20図 大溝南部実測図	30
第21図 大溝断面実測図	31
第22図 河道実測図	31
第23図 河道断面実測図	32
第24図 石積・木組両遺構実測図	33
第25図 低湿地実測図	34
第26図 低湿地断面実測図	35

第27図	窪地実測図	36
第28図	1・2号溝実測図	37
第29図	室町時代遺構分布図	39
第30図	I号遺構群実測図	40
第31図	1号土塋実測図	40
第32図	II号遺構群実測図	41
第33図	2・3号土塋実測図	41
第34図	38号土塋実測図	42
第35図	III号遺構群実測図	42
第36図	4号掘立柱建物実測図	43
第37図	4号土塋実測図	44
第38図	5号土塋実測図	44
第39図	V・VI号遺構群実測図	46
第40図	6号土塋実測図	46
第41図	7号土塋実測図	47
第42図	8号土塋実測図	48
第43図	9号土塋実測図	49
第44図	10号土塋実測図	49
第45図	VII～IX号遺構群実測図	49
第46図	11号土塋実測図	50
第47図	VIII号遺構群実測図	50
第48図	13号土塋実測図	52
第49図	14号土塋実測図	52
第50図	15号土塋実測図	52
第51図	16号土塋実測図	53
第52図	17号土塋実測図	54
第53図	18号土塋実測図	54
第54図	19号土塋実測図	54
第55図	20号土塋実測図	55
第56図	21号土塋実測図	55
第57図	22号土塋実測図	55
第58図	23号土塋実測図	56
第59図	24号土塋実測図	56
第60図	25号土塋実測図	57

第61図	26号土壙実測図	57
第62図	27号土壙実測図	57
第63図	28号土壙実測図	58
第64図	29号土壙実測図	58
第65図	30号土壙実測図	59
第66図	31号土壙実測図	59
第67図	32号土壙実測図	60
第68図	33号土壙実測図	60
第69図	X号遺構群実測図	60
第70図	34号土壙実測図	61
第71図	35号土壙実測図	61
第72図	縄文土器実測図1	64
第73図	縄文土器実測図2	65
第74図	縄文土器実測図3	66
第75図	縄文土器実測図4	67
第76図	縄文土器実測図5	68
第77図	縄文土器実測図6	69
第78図	縄文土器実測図7	70
第79図	縄文土器実測図8	71
第80図	縄文土器実測図9	72
第81図	縄文土器実測図10	73
第82図	遺構出土石器実測図	78
第83図	包含層出土石器実測図1	79
第84図	包含層出土石器実測図2	80
第85図	包含層出土石器実測図3	81
第86図	包含層出土石器実測図4	82
第87図	土製品実測図	82
第88図	竪穴住居出土土師器実測図	85
第89図	大溝出土土師器実測図1	86
第90図	大溝出土土師器実測図2	87
第91図	大溝出土土師器実測図3	88
第92図	大溝出土土師器実測図4	89
第93図	大溝出土土師器実測図5	90
第94図	河道出土土師器実測図1	93

第95図	河道出土土師器実測図2	94
第96図	低湿地出土土師器実測図1	95
第97図	低湿地出土土師器実測図2	96
第98図	低湿地出土土師器実測図3	97
第99図	窪地出土土師器実測図	99
第100図	大溝出土木器実測図1	102
第101図	大溝出土木器実測図2	104
第102図	大溝出土木器実測図3	106
第103図	大溝出土木器実測図4	108
第104図	河道出土木器実測図1	109
第105図	河道出土木器実測図2	110
第106図	竪穴住居・大溝・低湿地等出土石製品・土製品実測図	112
第107図	低湿地等出土須恵器実測図	115
第108図	各土壙・包含層出土土師質土器、陶磁器実測図	117
第109図	各土壙・包含層出土陶器実測図	118
第110図	各土壙出土木器実測図1	123
第111図	各土壙出土木器実測図2	124
第112図	各遺構出土木器実測図	125
第113図	各土壙出土木器実測図3	127
第114図	各土壙・包含層出土石製品実測図	129
第115図	16号土壙出土石製品実測図	130
第116図	各土壙出土金属器・土製品実測図	131
第117図	各土壙出土金属器実測図	131

表 目 次

	頁
第 1 表 Ⅲ号遺構群柱痕径一覧表	44
第 2 表 出土遺構・地区別土師器片一覧表	84
第 3 表 大溝出土木器地区別一覧表	101
第 4 表 河道出土木器地区別一覧表	110
第 5 表 土師質土器觀察表	120
第 6 表 漆器蓋・椀、木椀觀察表	127

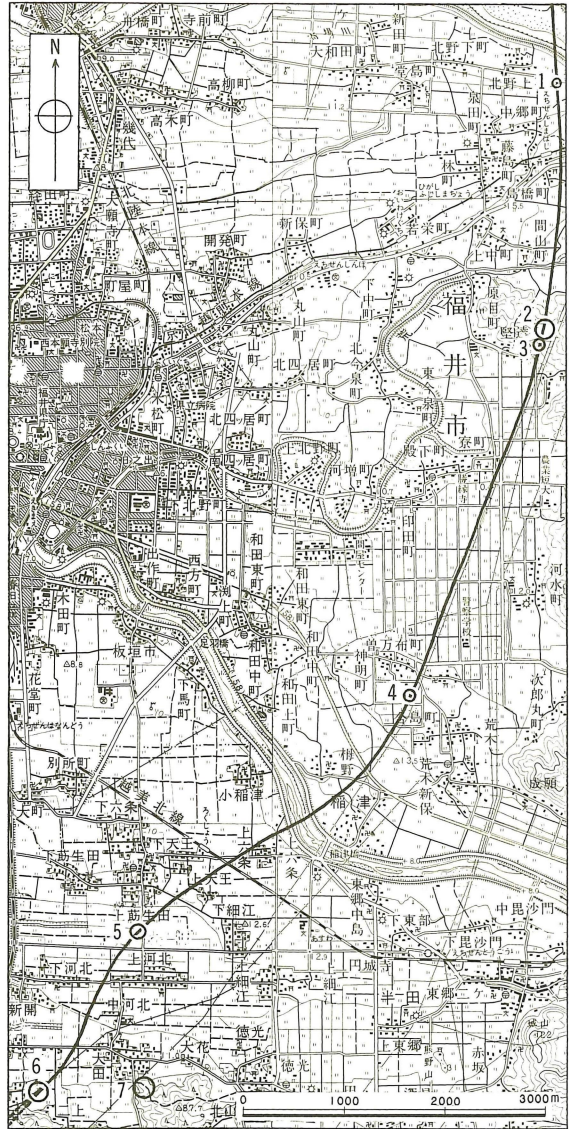
第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

曾万布遺跡は、昭和42年度に実施した北陸自動車道建設に伴う分布調査によって確認された。その当時、福井県教育庁文化課（以下県と略す）に提出された調査カードには、「曾万布遺跡は、足羽川が形成した扇状台地右岸に位置する。曾万布部落東端に神社があり、この神社の裏には南北100mを中心として遺跡が存在する。包含層の状態は不明。土中に包含層のあることや、その立地が周辺で一番高く、また、畑地であることからもうかがえる」と記す。また、採取遺物として土師器・須恵器片を挙げている。

その後、昭和43年（1968）頃には、北陸自動車道の路線もほぼ確定し、曾万布遺跡の一部も路線内に入るようになった。県では、北陸自動車道関係の遺跡の調査は昭和44年度から開始して、昭和46年度までには坂井郡金津町瓦谷窯跡、同郡丸岡町小黒池の上遺跡、吉田郡松岡町帝王三昧遺跡等の調査を順次実施してきた。しかし、九頭竜川以南の地域では原目山古墳群の保存問題がからんで、調査は一時宙に浮いた形で1年有余を経過した。そして、昭和47年（1972）の春に到って、原目山がオープン・カットで破壊されることに決定してから、工事予定が大幅に遅れていたこともあって、できうる限り早急により多くの遺跡の発掘調査を実施してほしい旨の要請が日本道路公団（以下道路公団と略す）からあった。

県としては、今まで県内の研究者達で1、2個所の調査を実施してきたのである



第1図 福井平野東部の北陸自動車道関係主要調査遺跡位置図（縮尺 1/75,000）

が、調査を担当できる人員が限られている実状を考えて、今までとは方法を変え、大規模な遺跡については県外の機関に調査を委託し、小規模な遺跡についてはできる限り県内の研究者で調査する方法をとった。曾万布遺跡については、立地からみて確かに遺跡の存在する可能性が高いが、実態は全く把握できていなかったのも、まず遺跡の性格を把握することを先決とした。そこで、昭和47年（1972）4月に予備調査を計画し、夏休みを利用して福井県文化財専門委員斎藤與次兵衛、同吉田 森、丹生高校教諭水野九右エ門、県の武藤正典の諸氏に調査を依頼し、8月6日から着手するに至ったのである。（仁科）

第2節 予 備 調 査

この調査は、上述のように8月6日から開始された。しかし、途中いくつかの問題が生じたため、同月13日で一旦打ち切ることとなった。そして、多少の空白期間を置いた後、丹生郡清水町片粕遺跡の調査を終了した県文化財調査員の山口・中司両名が、改めて調査体制を整えた上で引き継ぐこととなった。

ところで、予備調査終了後には、調査結果をまとめた概報が県に提出された。そこで、まずこの概報を掲載しておく。

曾万布遺跡の伝承および文献調査概報

日本考古学協会会員・福井県文化財専門委員 斎藤與次兵衛

曾万布遺跡に関する根本的伝承

古来、当集落の東南方200mばかりの距離にあたる曾万布第六字辰巳の元畠地帯は、古代曾万布集落の遺跡と言い伝えられ、付近の水田地域よりはやや高乾である。付近一帯は足羽川扇状地の扇端地帯をなし、地表面下わずかにして砂利盤礫層に達し、泉（清水）の湧水が豊富であり、日常生活に最も必要な飲料水を得やすく、且つ排水に便利で、山地と平地の幸に恵まれた古代村落の適地であったと考えられる。これまでも、牛舎付近の第7トレンチ付近からは、古代の遺物が出土したことがあると古老は語っている。合島集落名が足羽川氾濫時代の遺名のように考えられ、興味深く感ぜられるのである。現在の曾万布の春日神社の西方約120mばかりの所に、「舟かえり」と俗に昔からいわれている所がある。第6字辰巳に旧小学校があった。

曾万布村は、元神社が7社に墓地7三昧と言われていた。その7三昧の一つから搬入移転された高さ約60cmの五輪塔が2基、曾万布の春日神社の境内の高い所にある。その五輪塔の四方に梵字が銘記され、地輪の左側に永正四年（西暦1507年）1月4日、大永五年（同1525年）9月10日と銘記している。

『福井県史』第1編第3章庄園時代第1節越前の庄園の吉田郡の項に「曾萬布庄。吉田郡岡保村に大字名を存す。『兵範記紙背文書』によれば、長寛二年（西暦1164年）2月、同庄百姓等の解文案3

箇條あり。右によれば、同庄は当時山城東北院領にして、御庄建立以来百餘歳と云えば、凡そ後三条・白河の御代に施入立庄せられたるものと解すべし。而して元來の本免田は35町にして同院の佛聖料に宛てられ、備進懈怠なく伝来したりしが、勘出田と号してその中の17町を割取せられ、残るところ荒・熟田合して18町を佛聖料に宛てしむるに及び、一庄悲嘆に沈倫せり、然るに又利分田と称し、3町6反餘を押領せらるるに及び、庄民の苦痛甚しく、百姓の逃散を見んとするに及び、先例に測りて旧のごとく35町を庄領たらしめんと乞い、又同庄は、元來桑代綿等往古より徴収せられたることなく、寺家領として寺役一方の勤仕たりしが、美福門院の御沙汰として之を賦課せられ、後永万元年（西暦1165年）一度免除せられたるも、再び之を賦せられたるを以て、愁状を捧げたりき。鎌倉幕府時代の初葉、山城法城寺の領あり、藤原兼實の日記玉葉に、法城寺領越前曾万布庄民鏡を掘出すの間引見すべきの由見え、又藤原師盛の日記至徳二年（西暦1385年）の條にも庄民所見せり」とある。

條里制の遺名「市坪・十字彦町・二十九字網田町・三十字柳町・三十三字塚町等」が現存する。

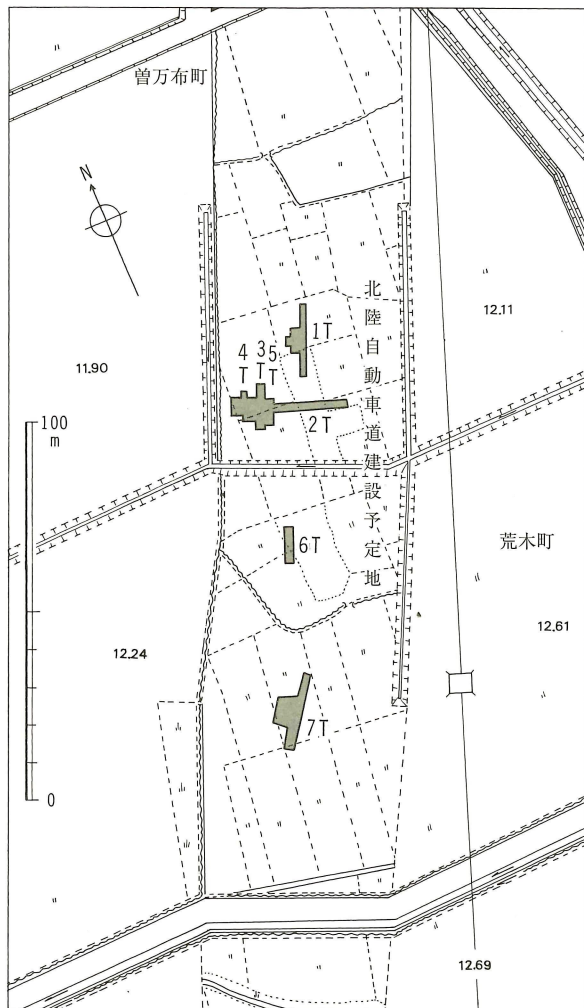
曾万布町第六字辰巳遺跡トレンチ略図（編者注一略図は省略し、トレンチの位置は第2・3図に示す）

備考 当地方では曾万布を「そんぼ」と呼んでいる。

第7トレンチの主なる遺物

石鎗の尖端の破損したるもの、鉄砲の筒など、南北60cmの深さより厚手・薄手の弥生式土器多数発掘。北半の深さ40cmより淡褐色弥生式土器、南半より尖底土師式土器の底部の厚さ15mmで内面黒色、外面茶褐色弥生式土器を発掘した。その西部は原表面は60cmばかり土取りしてあるが、現表面下30cmの所に土器・石器を包含し、灰黒色など竪穴住居を思わせるに充分である。柱址など発見し得ず残念であった。

第6トレンチは南に進むに従い遺物は少なくなるので、その6mは発掘中止のやむなきに至った。



第2図 予備調査区位置図（縮尺 1/2,000）

第3・4トレンチは5本の竪穴住居址のように思われた。排水の溝やその内側の畔状のものは発見されず、4本柱の3本柱だけが発掘された。地表面下92cmのところに生活面を思わせる弥生式土器が包含されていた。

第2トレンチの2より石錘が発掘された。

第1トレンチの5より土師質の高坏を発掘した。高さ7cm、坏の径8cmを有する破損したものである。その6より甕の破損したもの、その隣の境に竪穴式住居址の柱址らしきものが発見された。その7から剣の束、手裏剣の如きものが約1mはなれて発見された。

第4トレンチの3より鉄製品が下状に発見された。付近より木製品も発掘されたが、ともに注意を要するところである。

曾万布遺跡発掘調査日誌

8月6日（日曜）晴 曾万布第七字上富毛の皆川与一の田の畔で土器片を採集。発掘準備。

8月7日（月曜）曇 第1トレンチ2～20m、土師式高坏・剣。第2トレンチ2～20m、石錘。
第3トレンチ2～10m、地表面下20～30cmより土師器片発掘。

8月8日（火曜）晴 第4トレンチ2～4m、第5トレンチ2～8m、弥生・古墳時代の住居址の柱址発見。弥生式甕・壺・高坏等発見。

8月9日（水曜）晴 地表面下92cmに達する粘土柱の傍、淡青色粘土中に包含される弥生式土器を発見し、当時の生活面下概ね82cmと推定される。第6トレンチ2～20m、淡褐色土師式土器片発掘。

8月10日（木曜）曇 第7トレンチ2～20m、土師式破片群付近より鉄砲の筒状の錆びた遺物発掘。竪穴住居址らしきものの3カ所を発見した。

8月11日（金曜）雨のち曇

8月12日（土曜）曇 第7トレンチの北半は42cm、南半は70cmに発掘し、北半より淡褐色、南半より厚手・薄手の赤褐色の弥生式土器破片を発掘した。上層は土師式、下層は弥生式遺物が包含されている。竪穴式住居址の柱址と考えられるものが第3トレンチの4、第4トレンチの1と2(2)、第5トレンチの2から発見され、合計柱址5（但し粘土柱）となる。本日午後、第1トレンチの6より竪穴式住居址（径22cm）を発見した。第4トレンチの3より木製・鉄製遺物を発掘した。

8月13日（日曜）曇 曾万布町第六字辰巳の第4トレンチの竪穴式住居址と第7トレンチの南半を500cm×472cm拡張して吟味した。

以上が予備調査の報告である。ただ、念のため付記すると、記述内容そのものに問題が残り、筆者らの所見とは懸隔がきわめて大きい。なお、各トレンチ出土の土器・石器については、本調査時の出土品と一緒に本報告に収録した。

（中司）

第3節 本 調 査

1 発掘区の設定

予備調査において、第1～第7トレンチが設定されていたが、自然堤防の発達状況と土器片の散布域からみて、遺跡がさらに広範囲に広がるものであろうことが予測できた。そこで、より広域の調査に備えて、路線内の自然堤防にあたる部分を10m間隔で地区割りすることにした。

地区設定にあたっては、道路公団が設置した路線中心杭S.T.A.194が自然堤防のほぼ中央に位置していると考えられるので、これを基準として北へ15(1～15)区、南へ9(16～24)区を、また、東西を6(A～F)区に分割した。ただし、東西列については、道路の幅員が50mであるのに中心杭を基準に区分したため、A列はほとんど存在せず、F列も若干欠けることとなった。

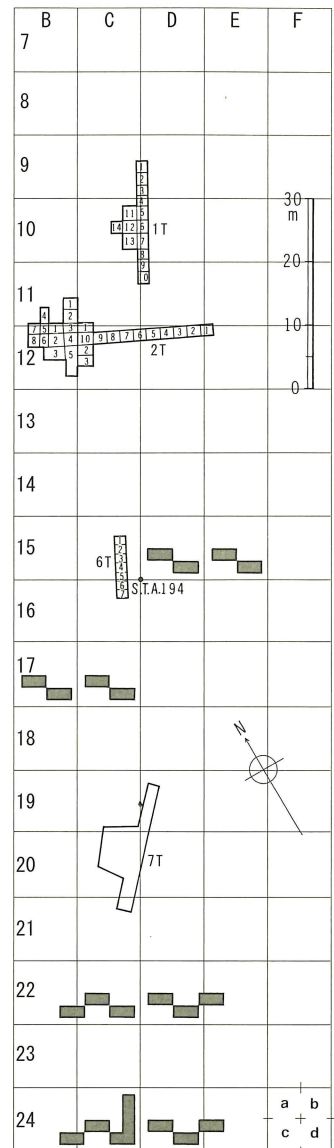
そして、一つの調査区が100㎡であるため、各区内を四分割し、一辺5mのa～d小区を設定した。また、その各小区さらに四分割し、一辺2.5mの最小区を設けた。

2 調査の経過

第1次調査

本調査は、8月28日から開始した。ただし、発掘作業を前任者から引き継いだばかりであり、遺跡の十分な把握ができていないので、まず第一に正確な遺跡の範囲と層序を確認する必要があった。それには、既に予備調査において掘り下げられている第1～第7トレンチを利用するのが最も穏当であると思えるので、まずこれらのトレンチを清掃し、その平面図や土層断面図の作成に着手した。その結果、全てのトレンチから遺物こそ出土しているが、明確な遺構の存在は確認できず、わずかに第1トレンチ内で、削り残された土壌(室町時代の36号土壌)の下部が確認できただけであった。

こうして、既掘のトレンチの清掃や図化作業から期待したような成果が得られなかったので、新たに地区割りした区域内で部分的な試掘を実施した(第3図アミかけ部分)。その結果、この試掘によって、15D・15Eの両区で時期不詳の小溝とその下層からの縄文土器片や、22D区では古墳時代の竪穴住居の一部が、それぞれ検出できた。また、東西に延びる自然堤防の南端が24



第3図 調査区割りと予備・第1次調査区(縮尺1/1,000)

区にあたると思えたので、この場所に南北のトレンチを設け、その大部分が自然堤防端に南接する低湿地であることを確認し、併せてその埋土中から多数の土師器片を採取した。そして、この結果をもとに、改めて予備調査における第1トレンチの断面観察を行い、トレンチの北部に溝状遺構が存在するのか、あるいは、低湿地にかかっているのではないかと推定されることが判明し、自然堤防の北端部かと考えられるに至った。

以上のようにして、遺跡の範囲や層序などの状況がほぼ把握できたと推測しえたので、これらの資料をもとに改めて道路公団と協議するとともに、調査体制を一新して全面的な発掘を実施するため、とりあえず9月15日で調査を打ち切った。

第2次調査

次に、いよいよ本格的な発掘調査に着手したのは、10月16日であった。発掘にあたる作業員としては、地元曾万布町を初め荒木町・荒木別所町・別所町など近郷在住の方々の参加を得た。また、常勤の調査補助員2名と非常勤の調査補助員である学生若干名とで調査にあたった。

ところで、調査地区については、道路公団から農業用排水路とアパート建設予定地の着工が遅れた場合、種々の問題が生じることが予想されるので、これらの部分だけでも早急に調査してほしい旨の協力要請があった。県としても、この2個所の地区は下層に縄文土器片の包含が予測されたり、埋土中に多数の土師器片が存在する低湿地であるところから、最も手間のかかる地区であることが予想されるので、まずこれらの地区から調査に着手することにした。このため、調査は13～15区と23～25区の2個所で並行して行った。

その結果、13～15区内では、路線をほぼ南北に斜めに横切る大溝が検出でき、埋土中から多数の土師器片や木器が出土し始めた。一方、23～25区では、既に第1次調査時に自然堤防の南端とこれに外接する低湿地の存在が確認できていたので、埋土中の土師器片を採取することに努めた。また、やはり既にその一部を確認していた竪穴住居も全面的に検出した。この調査は、冬期の天候不順のため、12月25日をもって打ち切った。

第3次調査

翌昭和48年（1973）には、4月に入って調査を再開する予定であった。ところが、道路公団より、前述の早期着工予定地区について、なるべく早急に調査を終了してほしい旨の再度の申し込みがあった。そこで、課内で検討の末、未だ天候不順であって発掘には適さない時期であるが、大溝や低湿地の調査には多くの日数を要することが予期されるので、3月に入りしだい調査を再開することに決定した。

なお、天候不順であったが、幸いなことにこの年は雪も少なく、大溝や低湿地では湧水に悩まされる程度であった。これらの地区の調査を完全に終了した後、発掘区を22区から北方へと広げていった。しかし、当初の予想に反して、自然堤防上の古墳時代遺構はほとんど検出できず、室町時代の遺構がほとんどであった。一方、7～9区では河道が検出できた。そして、この河道北縁より以北では、遺構・遺物の検出もないため河道縁辺部までで発掘を取り止め、以後道路敷内の東辺に

沿った工事用の仮設道路の撤去を要請し、道路下の調査にあたった。

この調査では、本遺跡が縄文・古墳・室町の主に3時代にわたっている事実が確認できた。そのため、上層の発掘だけでは不十分であり、とりわけ縄文時代の遺構の検出や遺物散布範囲の確認のために、各所でより下層までの発掘を実施した。遺構の複合が激しい13～17区東部では、都合3回の検出を行い、縄文時代遺構の調査を最後に、10月3日をもって全作業を終了した。

3 調査の概要

今回の調査の経過は、以上のとおりである。調査の結果、第8図に示した各遺構が検出できた。自然堤防の南端は24区であり、これより南域が低湿地であることは先にも述べた。この遺構がまちがいなく低湿地であって、大溝や河道でないことは、路線内のより南方における掘削工事に立ち会うことによって確認しえた。また、7区以北で河道の北岸に遺構が存在しないことも、同様に確定できた。したがって、南北約140mの自然堤防上だけに遺構が存在するわけである。

調査の対象区域は、南北約175m、東西50m弱である。その面積は、約8,500㎡である。ただし、この範囲内を全面的に発掘したわけではなく、路線敷の西部では遺構の分布が比較的希薄であったため、除外した部分もある。同様に、周辺の発掘区からみて遺構の存在が考えられない地区や、予備調査による既発掘部分、工事施工上の都合で発掘が不可能である部分など調査対象から除外した。それでも、本遺跡が複合遺跡であり、遺構の重複が2層以上にわたるため、同一箇所でも2回あるいは3回検出した地区も多く、発掘の延べ面積は10,000㎡以上になろう。

そして、重層的に重複する遺構を確認するため、縄文時代の遺物散布地区は全域、その他の地区でも東西方向に等間隔に確認のトレンチを設定しており、下層における大幅な遺構の見逃しがあるとはまず考えられない。また、最終的には、調査終了地区ごとに、南北方向に深さ2mまでパワー・シャベルで切断し、自然堤防の形成過程を調べるとともに、断面図の作成を行った。

4 調査体制

以上の第1～第3の調査関係者は次のとおりである。

調査事務局（福井県教育庁）

加藤秀雄（前教育長）、木村甚左衛門（現教育長）、谷口陸男（前文化課課長）、三輪千秋（現文化課課長）、大権一男・宮島昭市（以上前文化課課長補佐）、萩原和夫（現文化課課長補佐）、渡辺久治（前文化課文化振興係長）、松本利雄（現文化課文化振興係長）、小坂博師・松村忠祀・紫雲哲英・多田朝子（以上同課主事）、山崎恵美子・上野敬子

調査員

吉田 森・斎藤與次兵衛・水野九右エ門（以上福井県文化財専門委員）、武藤正典・木下召乙・青木豊昭・仁科 章・山口 充・中司照世（以上福井県教育庁文化課文化財調査員）

調査補助員

板垣敏子・勝 栄子・梶 幸夫・宮下秀之

木下哲夫・故 池田弘子（以上早稲田大学）、松井政信・桜井隆夫・富久尾 忠（以上立正大学）、佐々木大円（龍谷大学）、高嶋敬次郎（法政大学）、藤本良昭（大阪電気通信大学）、若杉謙一・竹内俊博（以上同志社大学）、伊藤隆三・山田一郎・上木 茂（以上福井大学）、水島幹夫・秋田重和・林 正則・上田順一・朝野 博・中野一之（以上福井工業高等専門学校）、吉田幸代（仁愛女子短期大学）、上田雅子・青木則子（以上金沢女子短期大学）、宮川雅臣・藤井繁治・宮地克郎・宮川祐一・前川雅彦（以上北陸高等学校）、山形留美（福井女子高等学校）

調査作業員

重房四郎右エ門・牧野多十郎・今川 覚・梅田弥左エ門・梅田勇次郎・織田健二・八木仁作・八木住吉・上木 勇・石丸 巖・新屋清吉・八木君知・高屋喜一・村田政吉・重房繁雄・吉田文作・竹内春松・藤井良子・平木アサヲ・今川春尾・八木秋尾・八木利子・村上春江・大橋重子・永田芳子・藤井清子・藤井君子・藤井トシヲ・石丸小常・高屋美智子（以上曾万布町）、前川信子・藤井弥生・藤井タケヲ・前川栄子・田中勝子・東 好子・柿本政子・吉田多美・橋本茂樹（以上荒木別所町）、井上定一・吉川惣次郎・桶谷清吉・高屋正士（以上荒木新保町）、宮川美代子（合島町）、鈴木順一・若杉岩作（以上印田町）、佐藤一夫（河水町）、前田定雄・泉 勝馬・高橋次松・好川八重子（以上次郎丸町）、北出二郎（荒木町）、小出忠雄（宮地町）、伊藤恒久（和田中町）

5 調査日誌

次に調査日誌の一部を収録しておく。

第1次調査（昭和47年8月28日～9月15日）

- 8月28日 本日から調査を引き継ぎ、作業開始。まず土層断面を観察するため、既設の第1トレンチ1～4区を深さ2m余りまで掘り下げる。その結果、土層中に木の葉や枝が含まれていることを確認。
- 8月29日 新たな試掘区を設けるため、道路公団が手配した作業員によって調査予定区の下草刈りを実施。まず15D・15E・17B・17Cの各区内を発掘し、小溝などを検出。
- 8月30日 22C・22Dの両区内の発掘で竪穴住居の一端らしい遺構を確認。試掘継続中の15E区から縄文土器片が出土し、複合遺跡であることが判明する。
- 9月2・3日 地貌上自然堤防の南端にあたると推測される24区に試掘区を設定。予測どおり低湿地であり、埋土中に多数の土師器片が含まれていることを確認。
- 9月5～11日 遺構分布の範囲は、本日までの調査である程度把握できた。そこで、次に縄文の分布範囲を明確にするため、各区内を下層まで掘り下げる。並行して調査終了の図化にかかる。

第2次調査（昭和47年10月16日～12月25日）

第3節 本 調 査

10月16～21日 第2次調査開始。草刈と杭打ちを行い、14区から発掘を開始。

10月23～26日 表土除去後、黄褐色シルト上では何の遺構も検出できなかったが、縄文時代の遺構調査のため掘り下げる。古墳時代の大溝の存在することが判明。

10月28日～11月13日 13区も発掘開始。土師器片の出土が多い。

11月14～30日 24区の発掘も並行して開始。やはり土師器片が多量に出土。

12月1日 本日から発掘と並行して一部の遺物の水洗作業を開始。

12月5～11日 22・23区を排土し、竪穴住居を発掘、写真撮影。

12月12～23日 遺物水洗および遺構の実測図を作成し、冬ごもりの準備のための器材収納。

第3次調査（昭和48年3月1日～10月3日）

3月1～8日 調査再開。13E・14Eの両区より発掘に着手。

3月9～12日 並行して19B～21Bの各区の発掘に着手。しかし、遺構はほとんど存在せず。

3月13～20日 建設中の福井県立短期大学の用地が北陸自動車道のための土取り場となっており、この用地内に2基の古墳の存在が確認されているので、曽万布遺跡の調査と並行して古墳周辺の地形測量を実施。

3月22～28日 大溝の延長線上にあたる11B・12Bの両区を発掘。

4月14日～5月9日 大溝の13C区も発掘。これをもって大溝の調査は終了。

5月10～17日 再度遺跡南部から発掘するため24・22の両区の調査に着手。

5月18～21日 21～19の各区を発掘。掘立柱建物を検出。安田喜憲氏によって、花粉分析のための資料を採取。

5月22～25日 24～19の各区の室町時代の遺構群の発掘を継続、終了。

5月28日～6月8日 下層の遺構の存否確認のため23～19の各区を掘り下げ。その後、発掘区を18・17両区へと拡張。

6月9～19日 15区までの室町時代の遺構を調査。その後、下層の縄文時代の遺構を検出。同時に、8・9区の河道に南北方向の横断トレンチを設け、断面図を作成。

6月20日～8月23日 河道部分の全域を発掘。さらに、10・11両区へと発掘区を拡張。

8月24日 工事用道路敷下の発掘のため9F～22Fの各区を機械で排土。また、調査が当初予定した8月中旬に終了しそうにないため、道路公団と期間延長を協議。

8月25日～9月1日 20～22各区のE・F列を発掘。遺構がほとんど存在しないことを確認。

9月4日 18F・19Fの両区を発掘。

9月6～10日 13F・14Fの両区を発掘。

9月11～24日 9F～11Fの各区を発掘、多数の土壌が存在することを確認。15F・16Fの両区も上層を発掘。

9月25～29日 16F・17Fの両区の下層の縄文時代の遺構を発掘。

9月30日～10月3日 縄文時代の遺構を実測。遺物を取り上げて全調査を終了。器材を撤収。

6 遺物整理体制

発掘調査の後、引き続いて遺物整理および報告書作成作業を実施した。この関係者のうち、調査事務局は前述のメンバーと全く同じであり省略する。その他の関係者は次のとおりである。

調査員

山口 充・中司照世

調査補助員

板垣敏子・勝 栄子

木下哲夫・西川博孝・車崎正彦・高橋龍三郎・石井良一・今橋浩一・長嶋雅子（以上早稲田大学）、松井政信・中山修宏・渡辺弘之・平井典子・今野睦子・山田トシ子（以上立正大学）、高嶋敬次郎（法政大学）、奥谷清隆（近畿大学）、柿島昭彦（国士舘大学）、沢野明博（日本大学）、上田雅子・青木則子・竹沢昌江・柳森よしみ（以上金沢女子短期大学）、平井恵子・西北泰子・辻よし子・柳生和枝・加藤千枝子・牧田知代・田中久代・北原尚子・西野秀美・川畑和枝・尾崎圭子・今村雅代・重森淳子・林田玲子・小沢典子・八木由美子（以上福井大学）、沢野明子（相模女子大学）、宮腰 環・光弘彰子・中村輝子・喜多直江・山田敬子・中林伸子・松原幸江・大久保恵美子・吉田悦子・岩崎真知子・華立利恵子・清水泰子・牧野美寿江・竹沢美智子・小林千鶴（以上福井女子専門学院）、島 直子（東海学園女子短期大学）、水上順子・松原幸江・山口貴美恵（以上仁愛女子短期大学）、黒川博子（光華女子大学）、篠田恭子（京都外国語大学）、笠島富美枝（市邨短期大学）、上野明理（武庫川女子短期大学）、田辺美幸・大橋清美・大野伊都子・天坂るり子・吉沢純子・林久美子・小林恵子（以上福井女子短期大学）、矢尾典子・高桑まり子（以上丸岡高等学校）、細田友子・藤川雅子（以上福井商業高等学校）、築地文博・沢野和子・水藤てるよ・谷口礼子・岡田明美・笠原真理子・三屋紀美代（中司）

第Ⅱ章 曾万布遺跡の位置と周辺の歴史的環境

曾万布遺跡は、福井県福井市曾万布町字辰巳に位置する。

福井市は、北は坂井郡、東は吉田郡・足羽郡、南は鯖江市、西は丹生郡などに接し、日野川・九頭龍川・足羽川などの諸河川によって形成された福井平野の南部に所在する。福井平野は、東西幅10km余りで南北に延びているのであるが、その地勢は東より西に向かって緩やかに傾斜している。そのため、平野南部を西流する足羽川は、越前中央山地から流出した後、南北両域に扇状地や自然堤防を形成する。曾万布遺跡は、この足羽川右岸の自然堤防上に存在する。

以下、各時代ごとに周辺の遺跡を記述する。

第1節 縄文時代

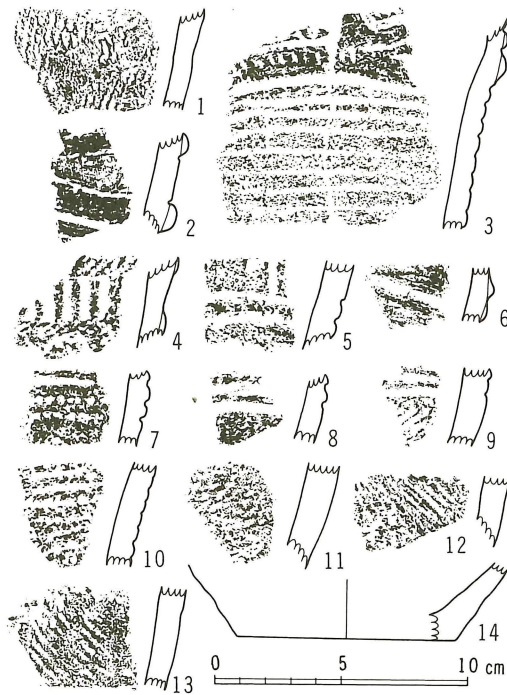
越前における石器発見の遺跡は、これまで九頭龍川上流域の支流沿いにある石徹白・温見を始め、福井平野縁部加越台地の陣ヶ岡周辺、加賀越前山地の坂井郡東部山麓、丹生山地や連接する海岸台地など、比較的高位を占める箇所より確認される例が多く、沖積平野内低位の土器出土は、極めて希薄であった。北堀貝塚以外には、嘗て足羽郡社村大字福（現福井市）から土器が出土した程度に過ぎず、石器を交えなかったこともまた、特異なことで留意された^①。

しかし、遺跡の分布が希薄であるとみなされていた沖積平野中においても、後代の遺跡の下層に縄文時代の包含層が存する場合がままあり、北堀貝塚のような存在を時間的・空間的に特異な例と考えることは、もはや困難な状況になってきている。

以下、曾万布遺跡の周辺に存する諸遺跡について略述したい。

当地において、古くより知られてきた先史時代遺跡の一つに吉田郡永平寺町鳴鹿遺跡（第5図1）があり、大野雲外^②・上田三平両氏らにより各々報告されている。本遺跡は、越前中央山地を西流してきた九頭龍川が形成した右岸の低位河岸段丘上に立地したと考えられているが、古く用水工事により偶然発見されたもので、層位関係・伴出遺物については不明である。今日、有舌尖頭器22個、石核2個、大型尖頭器1個、局部磨製石斧1個が確認されている^③が、耕地整理のために遺跡の旧形は失われたともいわれ、その実態は不明のままである。しかし、旧来より広く知られた遺跡であり、精緻かつ多量の有舌尖頭器の一括出土も相まって、草創期における極めて重要な遺跡の一つであるといえる。

九頭龍川は、福井沖積平野に流入するさい、吉田郡松岡町付近より緩やかな扇状地形を形成する。この左扇状上、福井市林町の水田中に林遺跡^④（同図2）が立地する。この扇状地上には弥生時代以降の遺跡も点在しているが、本遺跡は、地元在住の楠 幸家氏の丹念な表面採集活動によって、越前における晩期の大洞式系遺跡として著名である。出土遺跡には、土器以外には打製石斧等の石



第4図 福井市天神遺跡出土土器実測図（縮尺1/3）

器類、土製品、石製品等該期特有の多彩なものがあるが、とりわけ多数の石鏃と猪形土製品の出土が注目される。

足羽川が福井平野に流入するさい、右岸山麓に形成する緩傾斜面ないし段丘上に、福井市篠尾町新留^⑤（同図4）・天神^⑥（同図5）両遺跡が立地する。

篠尾町は、北方の谷奥から流出する小河川により形成された扇状地上に所在する。この扇状地下には洪積丘陵が埋没しているが、扇中央部において一部露頭している。この部分に新留遺跡は立地する。昭和37年（1962）新留古墳が土取りされたさい、封土下の断面に縄文時代の遺物包含層が露出し、遺跡は発見された。本遺跡からは、前期末から中期前葉の土器片、石器（打欠石錘）等が出土している。

足羽川が福井平野に流入する所に形成された河岸段丘は、前述した新留遺跡付近から連続する埋没丘陵に隣接している。この段丘上に天神遺跡は位置する。本遺跡からは中期の隆線を半載竹管により施す土器片等（第4図）を採集している。そのほか、本遺跡から出土した遺物に関する報告がある。

福井平野中を流れる足羽川の左岸は、曾万布遺跡の占地する右岸方に対し比較的低位で現集落もさほど整列しない。そうした水田中に福井市上河北町・上筋田町上河北遺跡^⑦（第1図5、第5図6）、その南方山麓に福井市二上町・半田町糞置遺跡^⑧（第1図6）が立地する。

福井平野内において、足羽川は右岸に自然堤防を形成するのに対し、左岸側では乱流してところどころに微高地を残存させる。この微高地上に上河北遺跡は立地している。当初、本遺跡は弥生時代以降の所産であると想定されていたが、昭和49・50年（1974・75）の北陸自動車道建設関連の調査により、弥生時代遺物包含層の約2m下層、間層に青灰色粘質土層を挟んで縄文時代遺物包含層が検出された。当地において未だ僅少例である縄文時代後期の低地遺跡として注目されよう。本遺跡からは、土器・石器以外には石製玦状耳飾、耳栓等が出土しており、後期の堀之内2式併行期を中心に存続したとみなされる。

こうした足羽川左岸の低地に広がる水田中の更に南方山麓、江端川を臨む微高地上に、糞置遺跡は立地している。曾万布・上河北両遺跡と同様に、北陸自動車道建設に関連して昭和48・49年（1973・74）に調査が実施された。当遺跡は、本来東大寺荘園跡の調査を主眼として実施されたが、むしろ前代の遺構・遺物が多数検出された。その最下層において、晩期後半代に比定し得る土器片が若干



- 1 鳴鹿遺跡
- 2 林遺跡
- 3 曾万布遺跡
- 4 新留遺跡
- 5 天神遺跡
- 6 上河北遺跡
- 7 下中遺跡
- 8 北今泉遺跡
- 9 荒木遺跡
- 10 手繰ヶ城山古墳
- 11 六呂瀬山古墳群
- 12 泰遠寺山古墳
- 13 石舟山古墳
- 14 鳥越古墳
- 15 二本松山古墳
- 16 春日山古墳
- 17 岩崎古墳
- 18 山頂古墳
- 19 大畑1・2号墳
- 20 飯塚古墳
- 21 天神山北古墳群
- 22 御茸山40号墳
- 23 御茸山44号墳
- 24 若栄遺跡
- 25 木田遺跡
- 26 大畑遺跡
- 27 成願寺遺跡
- 28 篠尾廃寺跡
- 29 寮C遺跡
- 30 東今泉遺跡
- 31 おやま砦跡
- 32 成願寺城跡
- 33 檜山城跡

第5図 福井平野東部遺跡分布図(縮尺1/50,000)

出土し、該地における空白期を充填するものとして着目された。

(木下)

第2節 弥生時代

曾万布遺跡の位置する福井平野東部における弥生時代の遺跡としては、福井市荒木遺跡^⑨（第5図9）・林遺跡^⑩（同図2）をまず挙げることができる。

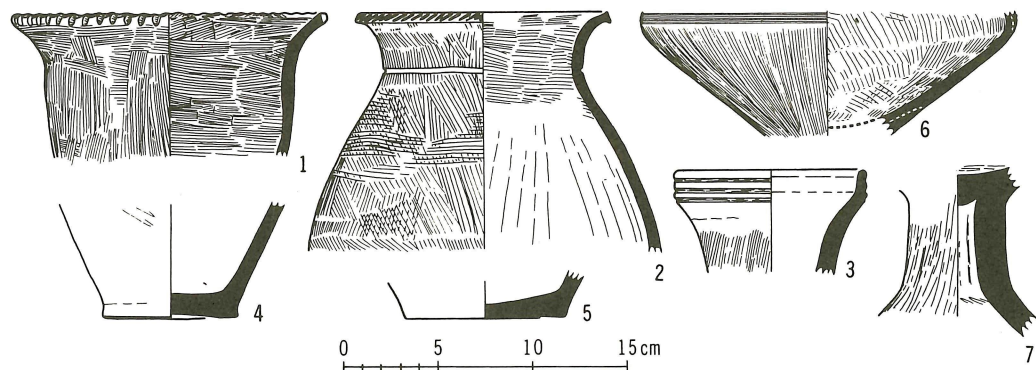
そのうち荒木遺跡は、曾万布遺跡の東南方約800mの、足羽川右岸の自然堤防上に所在する。本遺跡は、昭和43年（1968）に福井考古学研究会によって発掘調査が実施された。その結果、古墳時代前期の竪穴住居2棟をはじめ、溝・貯蔵穴などから、土師器、結晶質緑色凝灰岩の原石・破片、同管玉の未成・完成品など多くのいわゆる玉作り関係遺物が出土したが、それだけにとどまらず、弥生時代中・後期の土器多数も出土した。なお、これらの弥生土器をもとにした荒木Ⅰ～Ⅲ式の編年は、現在も越前地方における弥生土器編年の基準をなしている。

一方、林遺跡では、前述のように縄文時代の遺物も出土している。本遺跡は、昭和35（1960）に明治大学によって発掘調査され、溝などから弥生時代後期から古墳時代前期におよぶ多数の土器が出土した。ちなみに、これらの土器による林Ⅰ～Ⅲ式の編年は、主に越前の土師器編年の基準をなしている。

ところで、既述のように、今回北陸自動車道建設に伴って上河北遺跡^⑪、糞置遺跡^⑫、ならびに、福井市帆谷町太田山古墳群^⑬（第1図7）が発掘され、新たに弥生時代遺構・遺物の存在が明らかになった。前二者については既に取り挙げたが、ここでは弥生時代の遺構・遺物についてのみ説明する。

まず、上河北遺跡は、弥生時代中期の方形周溝墓2基をはじめ、時期不詳の方形周溝墓5基などと、弥生土器・石器各若干が出土した。

次に、糞置遺跡は、弥生時代中期の土壇墓45基、壺棺墓1基、中～後期の土壇墓10基、環状土壇群1個所、後期の土壇（土壇墓を含む）21基、環状土壇1個所、方形周溝1基が検出された。出土品は多岐にわたるが、まずなによりも豊富な土器量を挙げることができる。それらは唐古Ⅱ～Ⅴ



第6図 福井市下中遺跡出土土器実測図（縮尺1/4）

様式（以下、本報告では唐古を省略する）に並行し、越前地方における全期間を通した弥生土器編年が可能である。そのほか、石器には石鏃・磨製石剣・石庖丁・石鍬・扁平片刃石斧など、木器には弓・鍬・梯子など、それぞれ多数が出土した。

さらに、太田山古墳群は、文殊山から北方に派生する丘陵上に分布し、総数70基の弥生～古墳時代の墳墓からなる。昭和49年福井県教育庁文化課が緊急発掘を実施し、古墳に混在する形で、弥生時代中期の方形台状墓2基が検出された。そのうち太田山1号墓（辺長約19m）では、墳頂部で土壙1基が、墳丘の内外で供献土器7個が出土した。また、1号墓に南接する同2号墓（辺長約23m）では、墳頂部の土壙1基から小型管玉501個が出土した。これらの墳墓の調査によって、北陸地方でも既に第Ⅲ様式期に大型の方形台状墓が築かれていることが初めて明らかになった。

そのほか、福井市木田遺跡^⑩（第5図25）は、古墳時代を中心とする集落遺跡である。福井市教育委員会の多年にわたる調査によって、土師器に混じって弥生土器若干が出土している。

なお、今回曾万布遺跡の発掘に伴って、周辺域の遺跡の分布調査をも実施した。そして、弥生時代中期の福井市下中遺跡^⑪（同図7）・北今泉遺跡（同図8）の存在を確認した。この時期の資料は未だ少ないので、前者における採集品（第6図）を図示する。いずれも第Ⅳ様式に属するものである。（中司）

第3節 古墳時代

縄文・弥生両時代に比べて、古墳時代の遺跡の確認数はさきわめて多い。ただ、その大部分は集落遺跡ではなく古墳である。しかも、既に判明している集落遺跡は、先に弥生時代で説明した荒木・林・上河北・糞置・木田各遺跡にとどまる。そこで、ここでは集落遺跡の再度の説明を避け、古墳時代の動静を端的に表していると思える周辺の各古墳群と、それぞれの群内の主要な古墳を記述することにしたい。もっとも、調査を経た古墳を列举するには、その数は多過ぎるので、できる限り顕著な存在の古墳のみを取り上げ、略述することとしたい。

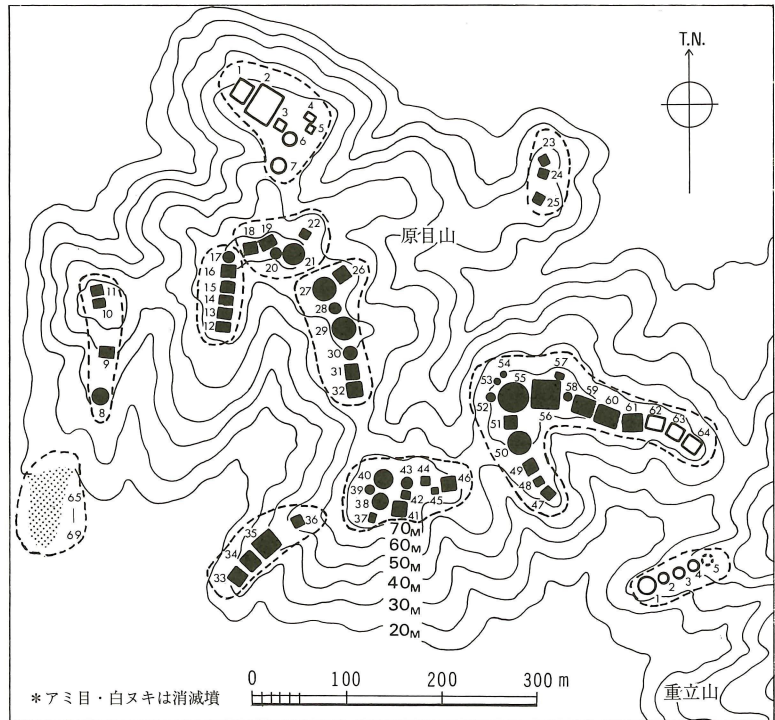
さて、今対象とする福井平野東部域の丘陵地帯には、松岡・酒生・御茸山の3古墳群がある。

松岡古墳群は、九頭龍川左岸の原目山^⑫・重立山・松岡丘陵などに分布する。本古墳群は総数132基を数える。群内の各古墳は、上述の所在丘陵によって主に3支群に分けうる。

原目山支群は、福井市原目町・堅達町の丘陵上に分布する。本支群は、これまで前方後円墳1基を含む総数45基からなる古墳群として知られてきた。しかし、今回改めて分布調査を実施した結果、墳丘は方形・円形を呈する古墳のみからなり、しかも総基数は消滅墳を含めて69基前後を数えるものと推定しうる^⑬（第7図）。本支群では、昭和41年（1966）に上水道建設に伴い、原目山1～5号丘が緊急調査された。そのうち原目山1・2号丘は、古墳時代前期の方形台状墓であり、同3号丘は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓3基と土壙墓13基が存在する自然丘陵であることなどが判明した。原目山1号丘（辺長約20m）では、土壙1基からは鉄刀2口、管玉325個、

ガラス小玉728個が、墳丘からは供献土器若干が出土した。また、同2号丘（辺長約30m）では、土壙5基からは鉄剣2口、銅鏃1本、素環頭鉄刀1口などが、各土壙上からは供献土器若干が出土した¹⁸⁾。なお、本支群では、昭和45、47・48年（1970、1972・73）にも同37～39号丘が発掘された¹⁹⁾。

重立山支群は、原目山に東接する福井市堅達町・吉田郡松岡町吉野の丘陵上に分布する。本支群は総数19基を数える。そのうち、重立山1～5



第7図 福井市原目山古墳群分布図（縮尺 1/8,000）

号墳が、原目山37～39号丘とともに緊急発掘された²⁰⁾。そのほか、本支群には三角山古墳・重立山16号墳などの前方後円墳（全長40～60m）があり、ともに群内の盟主墳である。

松岡支群は、松岡町吉野塚から同町志比塚にかかる丘陵上、あるいは河岸段丘上に分布する。本支群は総数38基を数える²¹⁾。丘陵先端部には、大型前方後円墳（全長約129m）で段築・葺石・埴輪を有する手繰ヶ城山古墳²²⁾（第5図10）がある。また、その南方の稜線上には、やはり大型前方後円墳（全長約85m）で埴輪を有する石舟山古墳（同図13）がある。昭和47年（1972）の調査で、埋葬施設の舟形石棺1基が検出された²³⁾。さらにその南方の山頂には、同様に大型前方後円墳（全長約90m）で埴輪を有する二本松山古墳（同図15）がある。埋葬施設として、古く南北に並置された各1基の舟形石棺が検出された。享保年間（1716～35）に、1号石棺から朱・人骨・勾玉・甲冑類などが、また明治39年（1906）に、2号石棺から仿製四神四獣鏡1面、金銅冠1個、鍍銀冠1個、眉庇付冑1領、三角板鋸留短甲1領などが出土した²⁴⁾。

一方、松岡丘陵の山麓部には、円墳（径約20m）の春日山古墳（同図16）がある。昭和28年（1953）に、横穴式石室から横口式石棺1基と鉄刀1口、鉄鉾1本、鉄地金銅張鏡板付釵1組などが出土した²⁵⁾。その西方に延びる河岸段丘上には、大型前方後円墳（推定復原長約100m）で葺石・埴輪を有する泰達寺山古墳（同図12）がある。埋葬施設の舟形石棺1基から、中国製半方形帯神獸鏡1面、仿製内行花文鏡1面、勾玉5個、トンボ玉2個などが出土した²⁶⁾。

以上が松岡支群内の主要古墳であるが、そのほかにも鳥越古墳・稲荷山古墳などのより小型の前方後円墳（全長50～60m）がある。本支群では段築・葺石・埴輪などの外部施設を完備、あるいは、その一部をそなえ、埋葬施設として舟形石棺を持つ大型前方後円墳の存在がきわめて特徴的といえる。

なお、近年、松岡古墳群と九頭龍川を挟んだ対岸の、坂井郡丸岡町六呂瀬から山崎三ヶの丘陵上には、やはり大型前方後円墳（全長約140m）の六呂瀬山1号墳²⁹（同図11）など、総数130基以上の古墳からなる丸岡古墳群が分布することが判明した。

次に酒生古墳群は、足羽川右岸の成願寺丘陵や篠尾の山麓部に分布する。本古墳群は、昭和48年の分布調査により、総数171基からなると報告されている³⁰。ただし、今回並行して実施した県教委の分布調査では、総基数は323基を数える。群内の各古墳は上述の所在地によって主に2支群に大別しうる。

成願寺支群は、福井市成願寺町から同市篠尾町にかかる丘陵上に分布する。本支群は総数132基を数える。既調査墳は存在しないが、丘陵先端部に前方後円墳（全長約47m）の酒生13号墳が、その東方のより高所に前方後方形（全長約31m）をなす同30号墳がある。中世の城砦の構築による改変のためか、墳形の確定が困難な古墳が多く、顕著な存在の古墳基数が少ないなど、なお問題が残る。ともあれ、酒生13号墳は群内でも初期の盟主墳である。

篠尾支群は、福井市篠尾町・高尾町の山麓部に分布する。本支群は総数191基を数える。篠尾扇状地の扇央部には円墳（径約20m）の新留古墳（同図4）がある。昭和37年（1962）、土砂採取に伴って埋葬施設の舟形石棺1基から人骨5・6体、銅鏡1面、ヒスイ勾玉1個などが出土した。そのほか、新溜古墳南方の飯塚古墳（円墳、径約43m）、北方の狐山古墳（円墳、径約26m）、車塚古墳（墳形・規模不明）、おかま古墳（墳形・規模不明）、御廟古墳（方墳、辺長約12m）などがあり、いずれも群内の歴代の盟主墳である。

また、御茸山古墳群は、酒生古墳群と足羽川を挟んだ対岸の御茸山丘陵やその西麓部に分布する。本古墳群は総数154基を数える。群内の各古墳は、やはりその立地により2支群に大別しうる。

御茸山支群は、福井市脇三ヶ町・城戸内町の丘陵上に分布する。本支群は総数104基を数える。丘陵先端部に前方後円墳（全長約70m）の御茸山40号墳（同図22）が、その南方に前方後方墳（全長約43m）の同44号墳が、さらに南方の最高所に前方後円墳（全長約45m）の同66号墳（鉢伏山古墳）がある。これらはいずれも群内における歴代の盟主墳である。

柚脇支群は、福井市柚脇町の山麓部に分布する。本支群は総数50基を数える。山麓西端部に小型前方後円墳（全長約21m）の御茸山106号墳と、やはり小型前方後円墳（全長約23m）の同127号墳がある。この2基も群内の二代にわたる盟主墳である。そのほか、昭和50年（1975）に、福井市教育委員会が宅地造成に伴って群内の小型円墳4基を緊急発掘した。

以上が福井平野東部の古墳群である。述べきたった各古墳を、墳形・埋葬施設・副葬品など判明している事実をもとに編年すれば、概ね次のようなことがいえる。

まず、酒生古墳群においては、成願寺支群（前・中期）→篠尾支群（後期）、御茸山古墳群においては御茸山支群（前・中期）→杣脇支群（後期）、というように墓域と歴代の盟主墳とが変遷している。つまり、古墳群の形成は、基本的には一系列である。ところが、松岡古墳群においては、主に原目山支群（前期）→重立山支群（中期）→松岡支群（後期）というように墓域と盟主墳とが変遷しているけれども、それと並行して松岡支群内においても独自に前・中期にかけて定式化したきわめて大型の古墳が造営されており、首長墓が重層的に営まれている。

したがって、松岡支群に存在する大型前方後円墳は、いくつかの地域集団によって推載された地域連合の大首長墓と考えてまちがいあるまい。また、丸岡古墳群にも同様な大型古墳が存在する事実は、ある時期そうした大首長が松岡・丸岡両地域集団から交互に輩出したことを示しており、その動態に双方の首長の勢威の盛衰を見ることができる²⁹⁾。なお、こうした大首長墓は、福井市足羽山で産出する凝灰岩製の舟形石棺を内蔵しているので、地域連合の範囲が平野中央部に所在する足羽山古墳群³⁰⁾（同図18ほか）まで及ぶことは間違いあるまい。

ところで、これらの各古墳群は大河川流域の丘陵上に所在するが、それぞれの河川に沿って自然堤防が発達しているので、各古墳群を造営した地域集団の基盤となる領域もおのずから想定することができる。改めて曽万布遺跡を取り挙げれば、本遺跡は足羽川右岸の自然堤防上に位置しており、必然的に酒生古墳群を営んだ酒生地域集団に属していたものと思える。（中司）

第4節 奈良～室町時代

律令期以降の遺跡は、未だ調査数がきわめて少ない。そこで一括して記述する。

この時代の調査遺跡としては、福井市篠尾町篠尾廃寺跡³¹⁾（第5図28）がある。本廃寺跡は、篠尾扇状地の扇央部に所在する。昭和46年（1971）、圃場整備事業に伴って県教委が緊急発掘を実施した。その結果、塔跡（辺長12.1m）の基壇と心礎、その他の礎石などが検出された。出土品には、須恵器・瓦・鋳型などがある。当寺は、白鳳期に創建され、奈良時代まで存続したものである。前述のように、この寺の背後の丘陵上には酒生古墳群があるので、古墳群を営んだ集団の後裔氏族が、その氏寺として造営したものとする説がある。

そのほか、今回の分布調査で、新たに福井市寮C遺跡（同図29）・東今泉遺跡（同図30）・大畑遺跡（同図26）・成願寺遺跡（同図27）などを確認した。いずれも須恵器片の採集であるが、寮C遺跡では布目瓦をも含んでいる。7世紀に遡るが、南東方の山裏側には東山公園墓地窯跡があるので、本遺跡もその立地からみて窯跡が存在する可能性がある。なお、福井市下中・河増・和田東・神明の各町内でも、須恵器片少量が採集されている。

鎌倉・室町時代の遺跡としては、まず福井市城戸内町一乗谷朝倉氏遺跡を取り上げるべきであろう。いまさらいうまでもなく、本遺跡は、戦国大名朝倉氏の居館跡を中心とする城下町である。ただし、特別史跡として、あまりにも有名な遺跡であるので、説明は省略する。

山城・砦と考えられる遺跡としては、酒生古墳群内で2箇所（同図31・32）を確認した。また、周知の遺跡であるが、足羽川を挟んだ対岸に福井市小安町檜山城跡（同図33）がある。

一方、集落跡としては、福井市下中・大畑・成願寺の各遺跡で遺物が採集されている。また、曾万布町内だけではなく、その東方の荒木別所・次郎丸・宮地・花野谷の各町内に、凝灰岩製の一石五輪塔の散在が確認できる。したがって、これらの町内では現集落と重複する形で、室町時代の集落跡があるのであろう。（中司）

注

- ① 上田三平 1933 『越前及若狭地方の史蹟』、が代表的なものとされている。
- ② 大野雲外 1897 「大いなる石鋒と精巧なる石鏃」（『東京人類学会誌』第140号）、ならびに注①文献に同じ。
- ③ 注②大野文献により紹介された遺物を所蔵する野沢久治氏の隣宅、野沢徳松氏が、有舌尖頭器出土地点より約20m離れた段丘より1921年頃発見、所蔵されている。
- ④ 広嶋一良・楠 幸家 1969 「林遺跡」（『福井県における縄文式土器集成』）。
- ⑤ 広嶋一良 1969 「篠尾遺跡」（『福井県における縄文式土器集成』）として記載された遺跡である。しかし、同町には後述の天神遺跡も所在しており、混乱をさけるため今回字名より、新留遺跡と呼称することとした。
- ⑥ 福井大学考古学研究会 1974 『福井市酒生地域における埋蔵文化財分布調査報告』で、古墳以外の発見遺構として報告されている遺跡である。注⑤の新留遺跡も同「口」として報告されているが、本遺跡の性格規定には問題がある。
- ⑦ 調査担当者・仁科 章氏。
- ⑧ 調査担当・平安京遺跡調査会（代表・田辺昭三氏）。
- ⑨ 大西青二・沼 弘・橋本幹雄 1970 「福井県荒木遺跡の調査」（『考古福井』第2号）。
- ⑩ 大塚初重 1965 「福井市林遺跡の調査」（『考古学集刊』第3巻第2号）。
- ⑪ 仁科 章氏の教示による。
- ⑫ 平安京遺跡調査会 1974 『糞置遺跡発掘調査速報』。
- ⑬ 福井県教育委員会 1976 「太田山古墳群」（『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第8集）。
- ⑭ 福井市教育委員会 1971・75～77 『木田遺跡』。
- ⑮ 本遺跡では、現集落に西接する排水路工事に伴って、主に3箇所の遺物集中出土地区を確認した。
- ⑯ 福井考古学研究会 1971 『原目遺跡 37号丘発掘調査報告』。
- ⑰ 1976年実施。調査にあたっては、立正大学学生中山信宏・平井典子両氏の協力を得た。なお、今回各墳墓に新しい号数を命名することによって、混乱をきたすことをさけるため、注⑯文献掲載の号数との統一を図ったが、それが困難なため、整理・改称した。その点を留意されたい。
- ⑱ 注⑯文献に同じ。
- ⑲ 堅田 直 1974 『原目・重立遺跡発掘調査略報告』。

第4節 奈良～室町時代

- ⑳ 注⑱文献に同じ。
- ㉑ 松岡町教育委員会 1972 『松岡古墳分布調査報告』。
- ㉒ 松岡町教育委員会 1975 『松岡3号墳（手繰城山古墳）の調査』。
- ㉓ 斎藤 優 1958 「松岡古墳群」（『文化財調査報告』第8集）。
- ㉔ 高橋健自 1908 「越前吉田郡石船山の古墳及発見遺物」（『考古界』第7巻第8号）。
- ㉕ 注23文献に同じ。
- ㉖ 注23文献に同じ。
- ㉗ 中司照世 1975 「六呂瀬山古墳とその陪冢」（『若越郷土研究』20-6）。
- ㉘ 注⑥文献に同じ。
- ㉙ 注27文献に同じ。
- ㉚ 斎藤 優 1960 『足羽山の古墳』。
- ㉛ 福井県教育委員会 1972 『足羽郡足羽町篠尾廃寺調査概要』。

第Ⅲ章 遺 跡

第1節 遺 跡 序 説

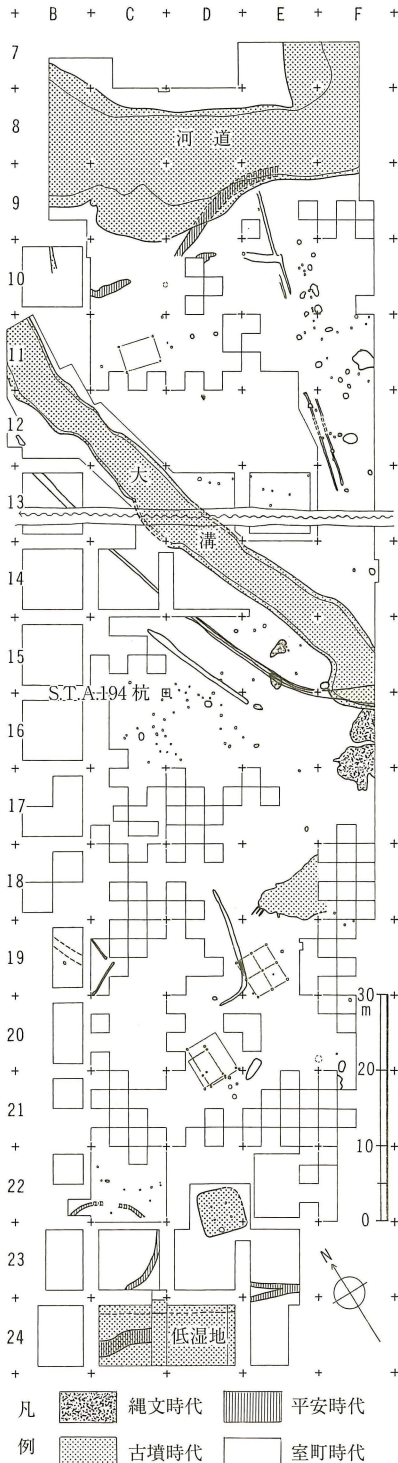
曾万布遺跡は、現在高速道路下になっているが、調査時にはその大部分が新たな圃場整備事業の対象から除外された旧区画の小型水田であった（第2図）。そこで、調査区設定は、第Ⅰ章第3節で述べたように、路線に沿って行った。ただ、発掘は、順を追って南端から北端へと進めたわけではない。既に予備調査によるトレンチ発掘が実施されていたり、臨時的農業用排水路が設置されているなど、調査が不可能な部分が存在した。そこで、それらの箇所を避けて、適宜実施した。さらに、道路公団の要請によって、双方協議の上、当面の工事着工部分の調査を先行させるか、あるいは、本線部分の調査終了後、工事用道路の付け替えを依頼して実施した。その結果、遺跡の南北両端が確定するとともに、多くの遺構を検出したわけである（第8図）。

次に、ごく簡単に遺構や土層の説明を行った後、各時代ごとに検出遺構を遺構番号順に記述する。なお、遺構番号は、今回の本報告にあたって若干の整理を行ったが、基本的には検出順につけたものである。また、縄文時代の遺構については、その機能を特定しえないので、古墳・室町稜時代の遺構との呼称の統一は図っていない。

さて、今回の調査で検出した主な遺構は、以下のとおりである。

- | | |
|--------------|--------------|
| (1) 縄文遺構 7基 | (2) 竪穴住居 1棟 |
| (3) 掘立柱建物 6棟 | (4) 土 壙 38基 |
| (5) 掘立柱堀 2条 | (6) 道 路 1条 |
| (7) 溝 20条 | (8) 大 溝 1条 |
| (9) 河 道 1条 | (10) 窪 地 1箇所 |

本遺跡の立地する自然堤防は、まず最上層に表土層があり、その下に順に黄褐色土層・黒色土層・黄褐色土層・灰色粘土層・砂層があり、最下層に基盤をなす砂礫層が位置している。そのうち、縄文時代の遺構は、第4層の黄褐色



第8図 全遺構分布図（縮尺 1/1,000）

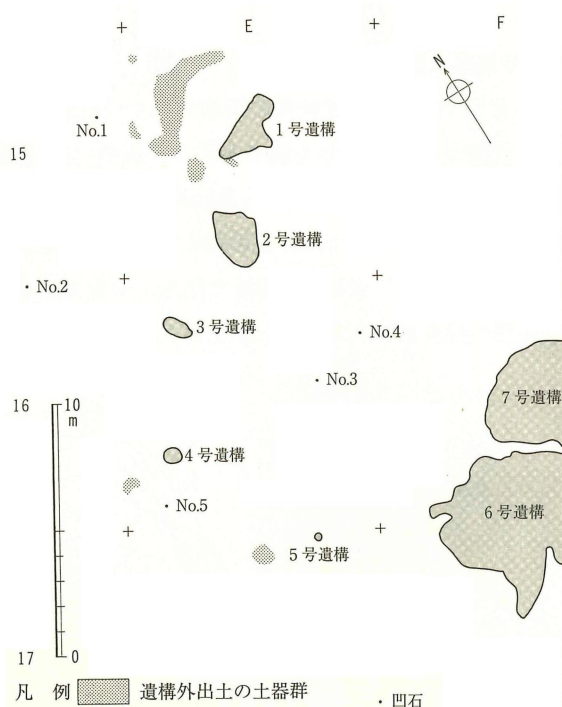
土層に位置し、古墳・室町両時代の遺構は第2層の黄褐色土層に位置する。(中司)

第2節 遺跡各説

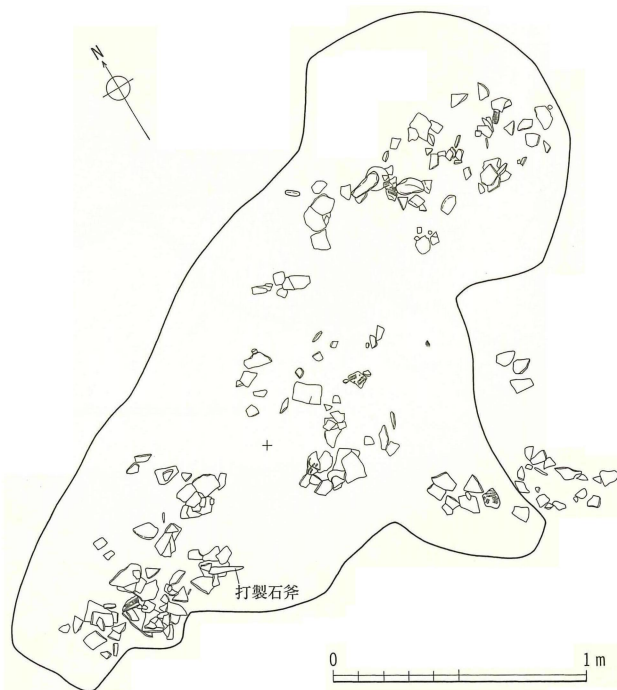
1 縄文時代

A 概要

当初、古墳時代から室町時代にかけての集落跡であろうと想定された本遺跡であるが、予備調査での石錘の発見、第1次調査における縄文土器片の出土より、既に縄文時代にも営まれていたことが確認された。また、第1次調査中、隣接する東側水田の水路断面より縄文土器片を採集し、遺跡が該期東方へ展開していたことも検証された。調査の結果、縄文時代の所産とされる遺構を7箇所、古墳時代の包含層の下層より検出した。それらは、第10図に示したとおり主に15～17・D～F区に分布している。また、1号遺構の北西、15 E区において遺構肩部と同一レベル上に遺物の散布が認められるなど、遺物も遺構の検出地区を中心として出土した。しかし、本時代の遺構の埋土は、地山面と極めて同質であり、その識別が困難で、酸化鉄分の垂下、遺物の包含の有無などによって判別した。したがって、検出レベル、形態については細部に正確さを欠く憾みがある。こうした事由に依り、検出遺構の保有する性格は各々異なっているようだが、個別に規定しがたいため、それぞれを遺構と称し、検出順に号数を振り順次報告することとする。



第9図 縄文時代遺構分布図(縮尺 1/300)



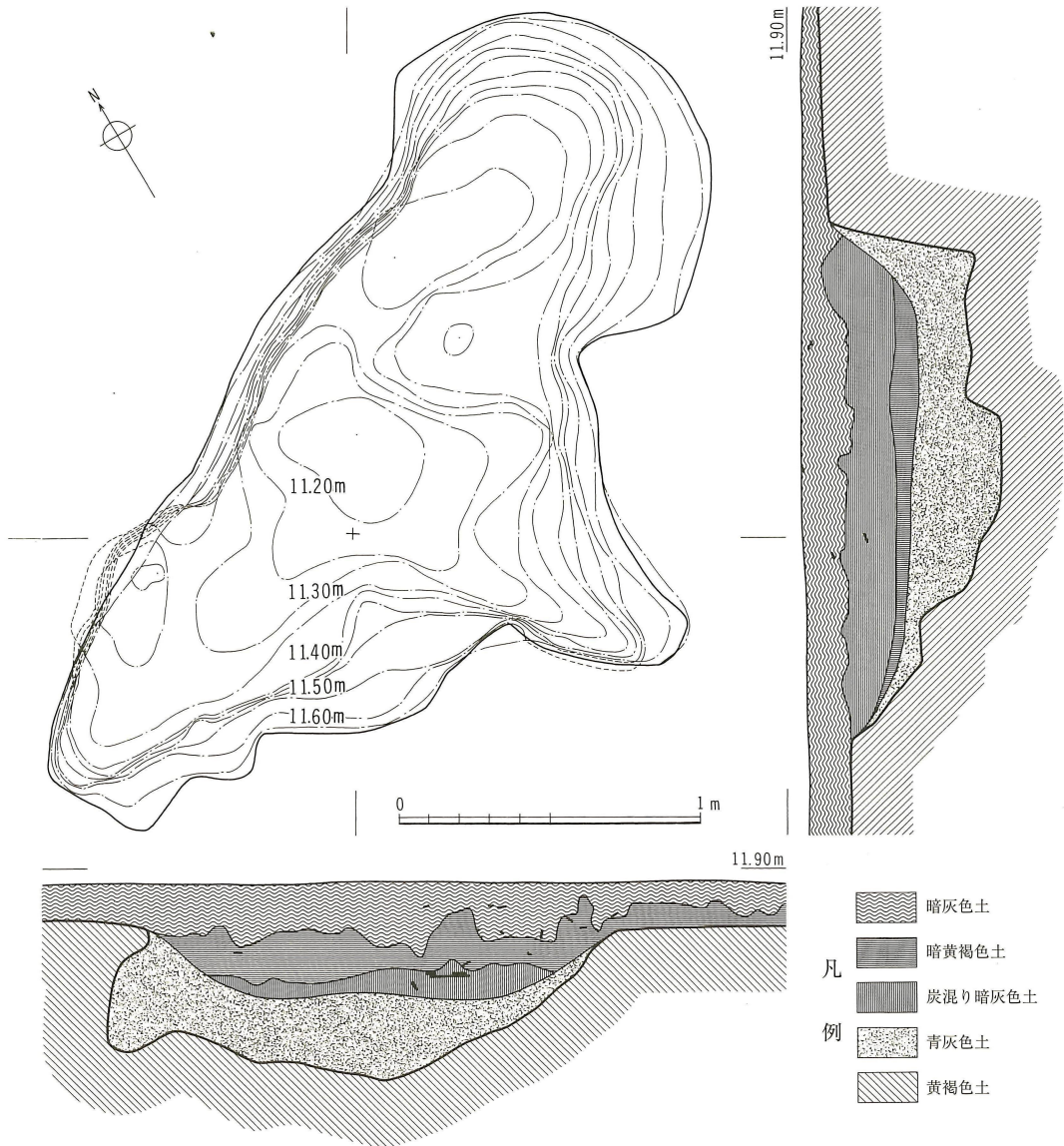
第10図 1号遺構上面遺物出土状態実測図(縮尺 1/30)

B 遺構

1号遺構（図版第6・7、第10・11図）

15 E区で検出。縄文時代の遺構の中で最も北方に位置する。

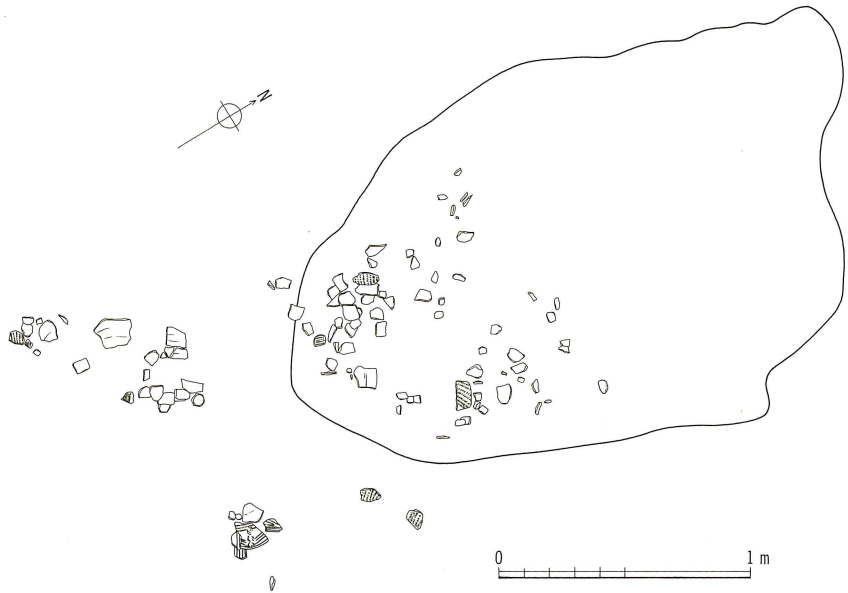
平面形が長楕円形の土坑であろう。長径（東西長）約310cm、短径（南北長）約120cm、深さ約55cmを測る。南側に東西20～50cm幅、南北約50cmの張り出し状の掘り方を有する。壁面は北縁が直立するのに対し、南縁は比較的なだらかである。しかし、崩落により、その旧形状については不定である。また、底面も2箇所凹み、一定ではない。本遺構は地山（黄褐色土）より下層の青灰色土層へ掘り込まれており、覆土は上層（暗黄褐色土）、中層（炭混り暗灰色土）、下層（青灰色土）



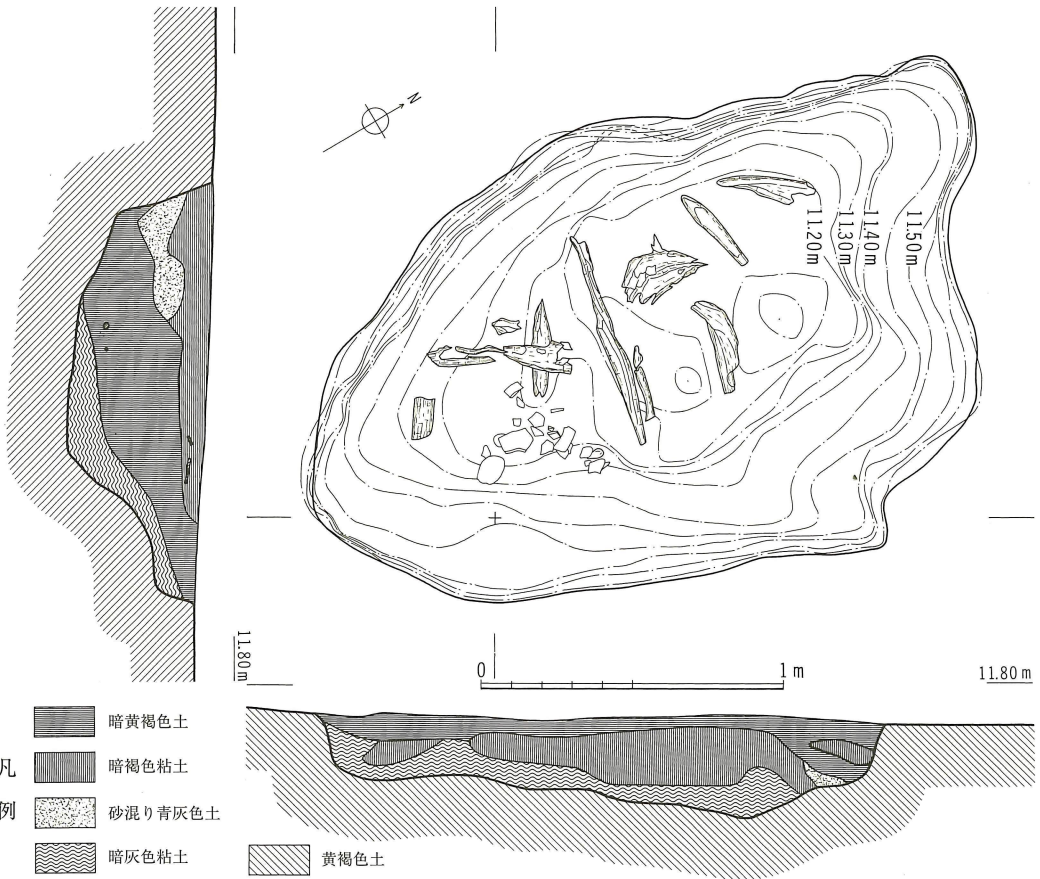
第11図 1号遺構実測図（縮尺 1/25）

に分層できた。しかし、東縁では肩部を明確に検出できなかったの
で、遺物が混在している。遺物は主に覆土上層、中層より縄文土器片
2,341個（完形土器1個）、打製石斧1個が出土している。

2号遺構（図版第8、第12・13図）



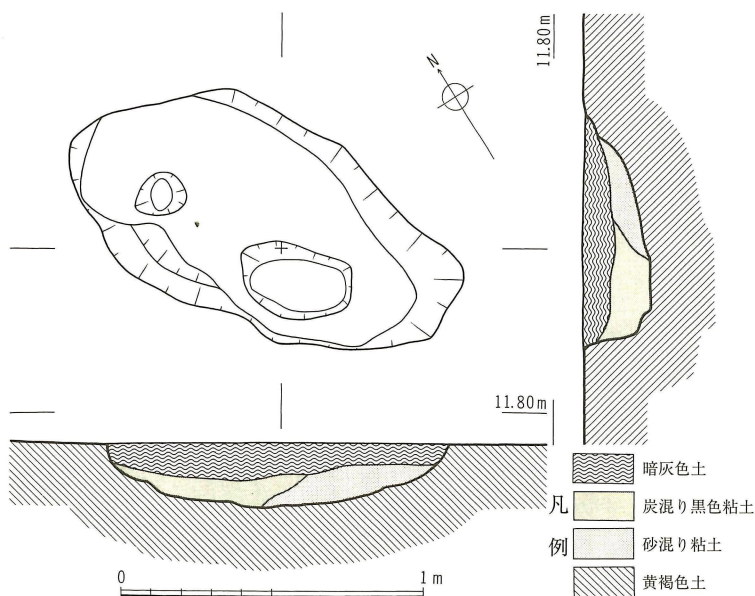
第12図 2号遺構上面遺物出土状態実測図（縮尺1/30）



第13図 2号遺構実測図（縮尺1/25）

15 E区、1号遺構の南西方より検出。

平面形が楕円形を呈する土壌であろう。長径（南北長）約260cm、短径（東西長）約170cm、深さ約45cmを測る。覆土は東方より西方に傾斜して、上層（暗黄褐色土）、中層（暗褐色粘土）、下層（暗灰色粘土）に分層でき、上・中層間に砂混じりの青灰色土がブロック状に混入する。遺物は、



第14図 3号遺構実測図（縮尺 1/25）

遺構南半より外周へ、主として上層より縄文土器片1,309個（有紋大形破片1個）、木製品が若干出土している。

なお、本遺構中より出土した木製品よりC¹⁴年代測定用の試料を採取し、学習院大学に送付した。その結果が得られているので、それを記載する。B. P. 2790 ± 90 (840B. C.)。

3号遺構（図版第8、第14図）

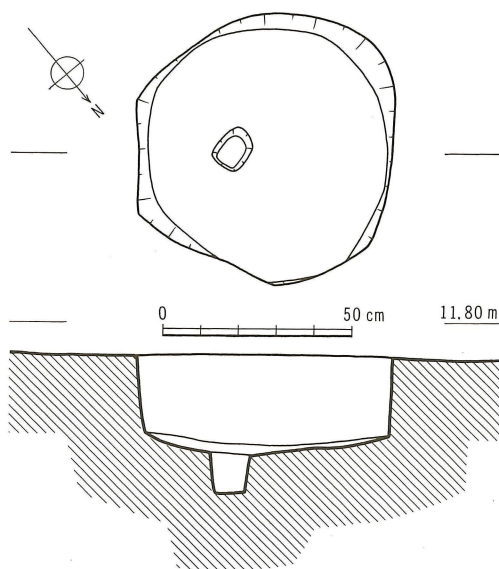
16 E区、2号遺構の西方より検出。

平面形が長楕円形を呈する浅皿状の小土壌である。長径（南北長）約135cm、短径（東西長）約65cm、深さ約20cmを測る。底面は比較的平坦であり、2箇所の小ピット状に凹んでいる。覆土は上層（暗灰色土）、下層に分層でき、下層は炭混り黒色粘土、砂混り粘土で二分された。本遺構からは縄文土器片13個が出土している。

4号遺構（図版第9、第15図）

16 E区、3号遺構の南西方で検出。

平面形が略円形の土壌である。口径約70cm、深さ約25cmを測る。壁面は直立し、底面は比較的フラットで、中心よりやや東南に口径、深さともに約10cmのピット状に掘り込まれてい



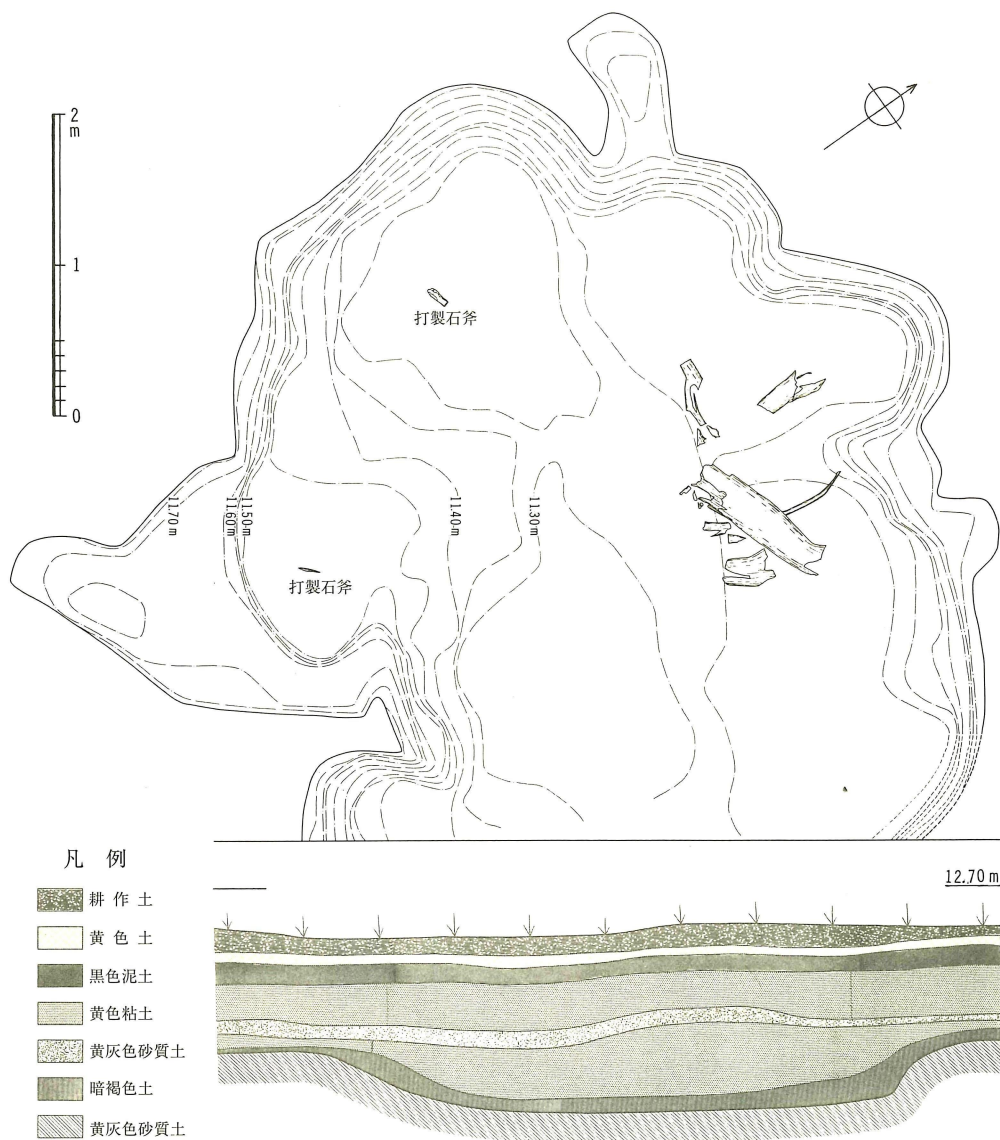
第15図 4号遺構実測図（縮尺 1/20）

る。覆土はピット中、底面付近以外は1層である。本遺構検出面より約10cm上面において土器が散乱しており、本来はその面より掘り込まれた土壌であると考えられる。遺物は縄文土器片179個（有紋大形破片1個）が出土している。ほかに土壌底面より焼けた鳥獣骨片が出土しているが、種別は不明である（早稲田大学講師・金子浩昌氏鑑定による）。

5号遺構（図版第9）

17 E区、4号遺構の南方より検出。

口径約35cmのピット様遺構である。覆土より縄文土器片5個が出土している。

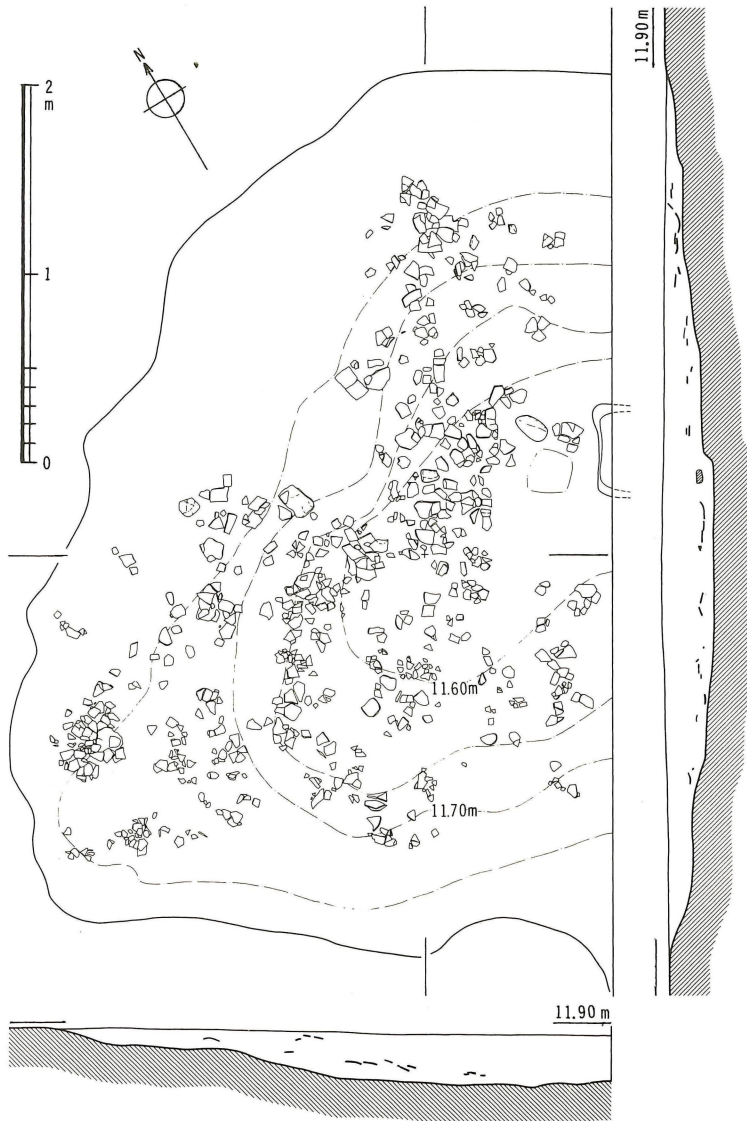


第16図 6号遺構実測図（縮尺1/50）

6号遺構（図版第10、第16図）

16～17 F区、5号遺構の東方より検出。南東側で調査区外に伸長し、未掘部分が残存する。

平面形は恐らく楕円形をなし、鍋底状の断面形を呈する。検出長径（北西・南東方）約495cm、短径（北東・南西方）約465cm、深さ40cm強を測る。壁部は北西及び南西に張出す所があり、底面は若干起伏する。覆土は上下の2層であるが、同一堆積が遺構外まで連続、その上位には水平堆積が観察される。こうした状況から、本遺跡の性格規定について人為的なものかどうか疑問も残る。縄文土器片22個、石器5個（打製石斧3、磨製石斧1、磨石1）が出土している。



第 17 図 7号遺構実測図（縮尺 1/40）

7号遺構（図版第10、第17図）

16 F区、6号遺構の南西方より検出。6号遺構同様、南東側で調査区外に伸長し、未掘部分が残存する。

平面形については、恐らく崩れた隅丸方形を呈する土壌であろう。検出長径（東西方）約345cm、短径（南北方）約390cm、深さ約25cmを測る。底面形態は、三方の壁より中央へと緩やかに傾斜し、遺物の出土は若干分離した上位からであった。縄文土器片2,134個（有紋大形破片5個他）、石器2個（石皿1、剝片1）が出土している。

（木下）

2 古墳時代

A 概要

そもそも本遺跡の発掘の契機となったのが、今回の調査地における土師器片の採集である。そして、予備調査においても、かなりの量の古式土師器が出土した。そのため、本遺跡は、弥生時代後期末から古墳時代中期にかけての集落跡であろうと想定して発掘を開始した。しかし、人為的な遺構は予想よりはるかに少なく、わずかに竪穴住居と溝を検出したにとどまった。それでも、自然堤防の南北両端の間を全長約175mにわたって発掘したため、当時の地形がほぼ正確に把握でき、併せて、遺構内に廃棄された土師器・木器を中心とする多数の遺物をも検出できた。

調査の結果検出した主な遺構は、次のとおりである。

- | | | |
|-------------|------------|-----------|
| (1) 竪穴住居 1棟 | (2) 溝 2条 | (3) 河道 1条 |
| (4) 低湿地 1箇所 | (5) 窪地 1箇所 | |

さて、これらの遺構は、調査範囲である7～24区に散在する(第8図)。すなわち、調査区の南端は、自然堤防端の低湿地である。一方、その北端は、足羽川の分流である河道の存在によって区切られている。

B 遺構

竪穴住居(図版第11、第18図)

22・23D、E区、自然堤防の南部で検出。

平面形が隅丸方形の竪穴住居である。東西長約5.7m、南北長約6.2m、壁高0.03～0.09m、床面積33.85㎡を測る。耕作など攪乱のため、北東部の壁を欠く。対角線上に柱穴4本と、南壁に接して貯蔵穴1基とを有する。柱穴は、それぞれ径21～28cm、深さ22～23cmを測る。南辺の柱穴2本は外傾する。北西部の柱穴の周囲に薄い焼土の散布がみられるが、常設的な炉は存在しない。

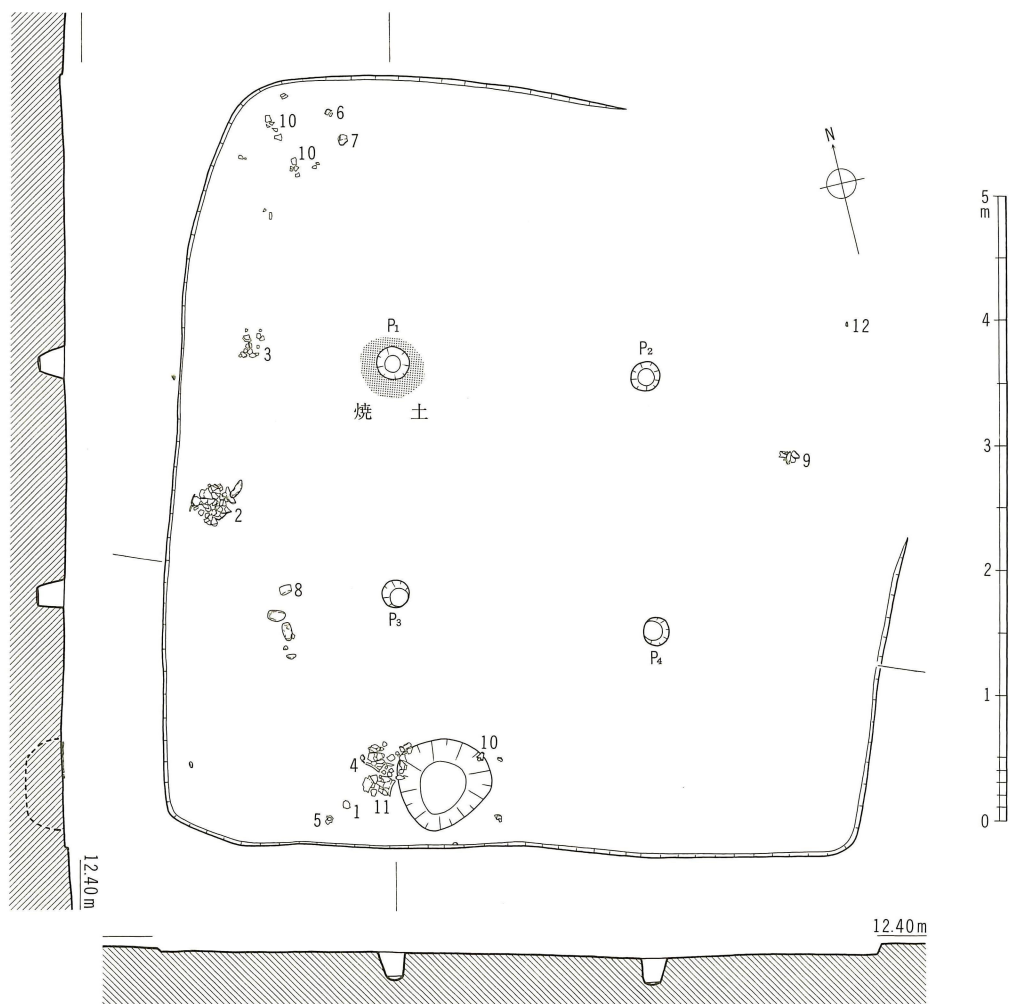
遺物は、一部が東部の東壁寄りから、大半が西部の壁沿いから、それぞれ出土している。東壁沿いにおいては高坏1個(第18図9)、硅質緑色凝灰岩片1個(同図12)が、西部壁沿いにおいては甕4個(同図1～4)、蓋1個(同図5)、壺2個(同図7・8)、高坏1個(同図10)、ミニチュア土器1個(同図6)、土玉1個(同図11)、礫5個などが出土している。

大溝(図版第12・13、第19・20図)

11B区から15F区にかけての自然堤防の中央部で検出。

遺跡を斜めに横断する形で延びる人口の東西大溝である。検出部分の長さ約70m、上端の幅約3.6～8.8m、下端の幅約3.0～7.2m、深さ約1.3～1.6mを測る。この溝は、西流後調査区内で北西方に流れを変え、その西端で再度北方に流れを変える。おそらく、最終的には、調査区外で河道に合流するものと思える。

溝の東端では南岸に膨らみを有するが、これに西接する溝のわずかにや狭まった箇所には、溝の幅を三分する形で径7cmの杭2本を打ち込んでいる。11B区では、径5～7cmの杭を20～30cm間隔で並べて、その中間に植物質のものを交互に絡みつけたしがらみが、溝をせき止める形で設置され



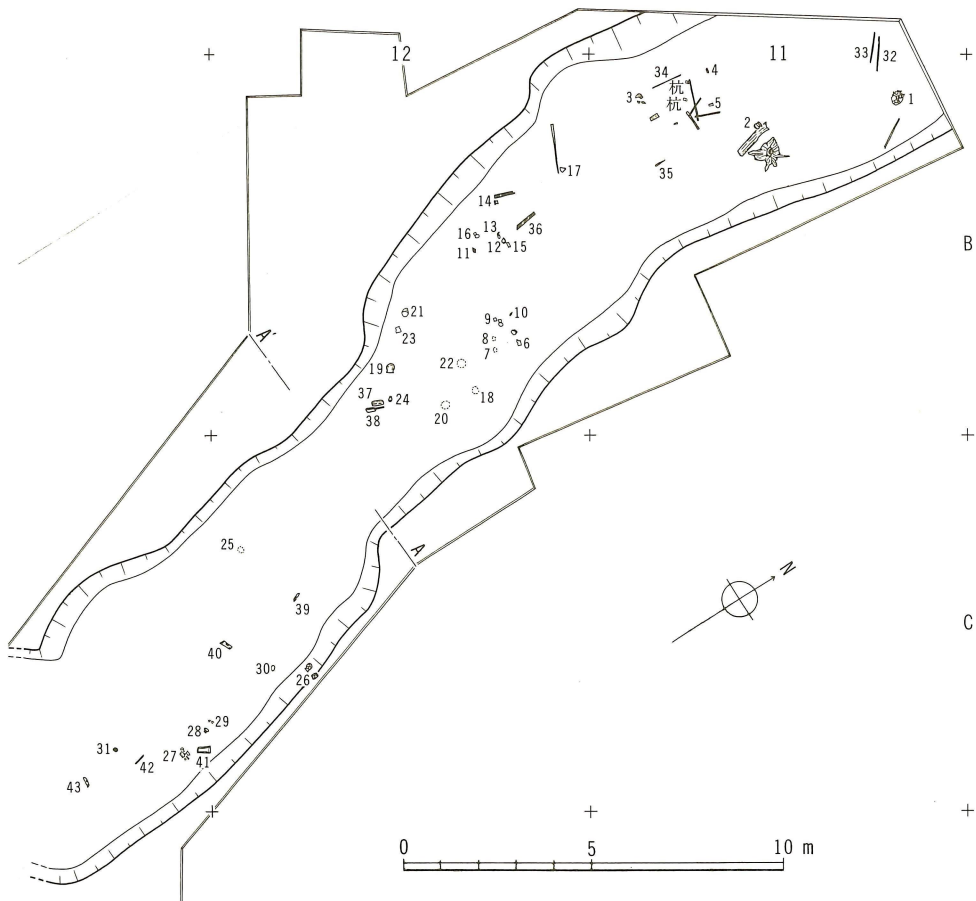
第18図 竪穴住居実測図（縮尺 1/60）

ている。

この溝は、これらの地周辺で基盤をなす灰色砂を掘削して構築している（ちなみに、15 F 区周辺の砂礫層は地表下約2.2m以下に存在する）。古墳時代遺構の検出面は、表土直下の黄褐色粘質土層上面であるが、一部の断面（第19図A - A'）では溝の上端部が未詳である。

溝の埋土は8～11層からなる。下層の埋土は、砂礫層・砂層・砂と粘土の互層が主体をなす。中・上層の埋土は、灰色粘土・暗灰色土・暗褐色土・黒色（泥）土・黄褐色土が主体をなす。つまり、この溝は当初かなり激しい水流があったが、深さの約1/2埋積後、きわめて緩やかな流れに変わったことを示している。

なお、この溝の15 F 区断面から、¹⁴C年代測定用の試料を採取し、学習院大学に送付した。その

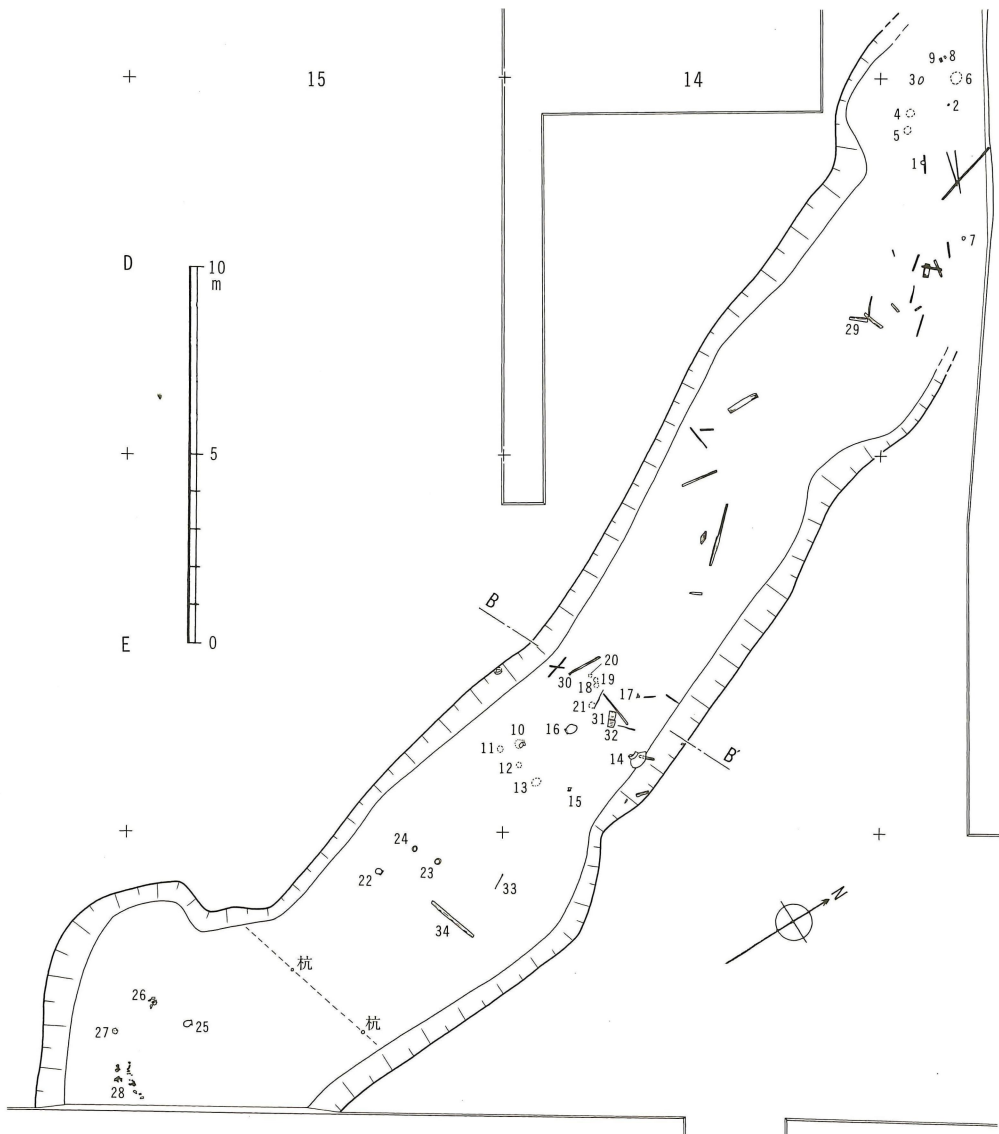


第19図 大溝北部実測図 (縮尺 1/200)

結果報告を受けているので、それを列記する。ただし、説明にあたっては12 B—12 C区断面実測図がふさわしいので、これを用いたい。

まず、溝の西岸の自然堤防では、黄褐色粘質土層直下に一部存在する黒色土が、B. P. 3130 ± 95 (1180B. C.) である (Code No. Gak - 4871)。この黒色土は、縄文時代遺物包含層である。また、表土直下の黒色 (泥) 土が、B. P. 1910 ± 90 (A. D. 40) である (Code No. Gak - 4872)。次に、溝の埋土では、溝底の杭が B. P. 1510 ± 85 (A. D. 440) である (Code No. Gak - 4873)。溝底より 50cm 上位の灰色土層内に位置する黒色 (泥) 土が、B. P. 1540 ± 80 (A. D. 410) である (Code No. Gak - 4874)。その4層上の黒色 (泥) 土が、B. P. 1590 ± 80 (A. D. 360) である (Code No. Gak - 4875)。

遺物は、主として中・下層の埋土から、一部弥生土器片を含む土師器片 13,677 個、木器 70 個以上のほか、流木・木の根・ヒョウタンなど若干が出土している。



第20図 大溝南部実測図 (縮尺 1/200)

溝

10 B 区、自然堤防の北端部で検出。

小型の南北溝である。検出部分の長さ3.3m、幅0.45～0.8m、深さ0.15mを測る。遺物は、土師器高坏1個が出土している。

河道 (図版第14～16、第22～24図)

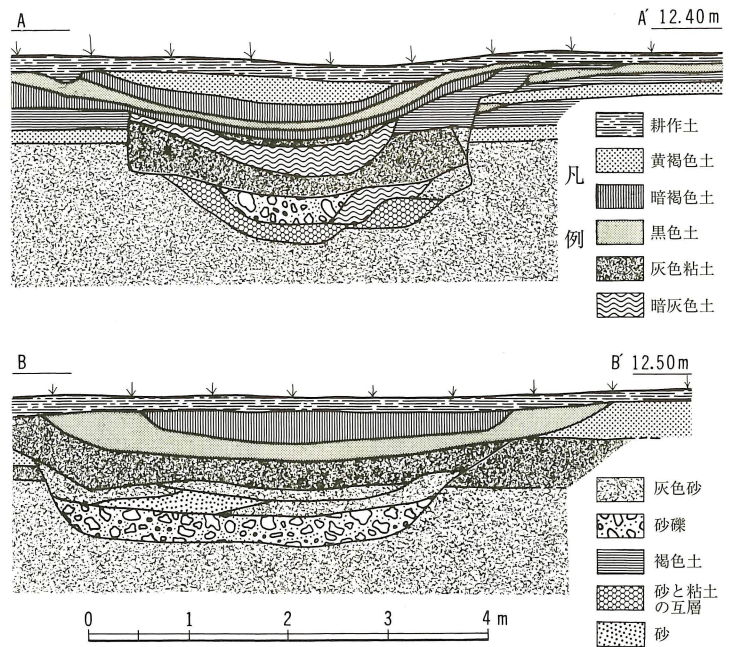
7 B 区から9 F 区にかけての自然堤防の北端部で検出。

調査区を横断する形で延びる大型の東西河道である。検出部分の長さ約41m、上端の幅約9.6

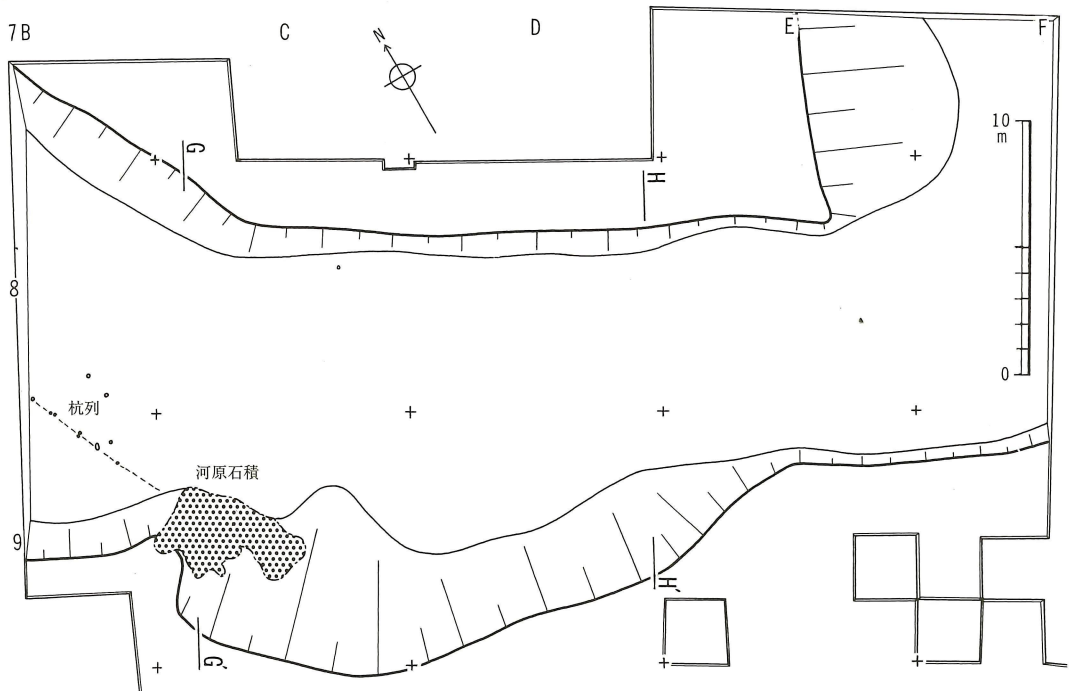
第2節 遺跡各説

～19.5m、下端の幅約8.4～15.4m、深さ約1.0～2.2mを測る。この河道は北西流してきた足羽川の分流の一つが調査区内でさらに1条分岐し、本流はそのまま北流しているが、支流は西流しており、その支流にあたる。なお、8E区がその分岐点にあたる。

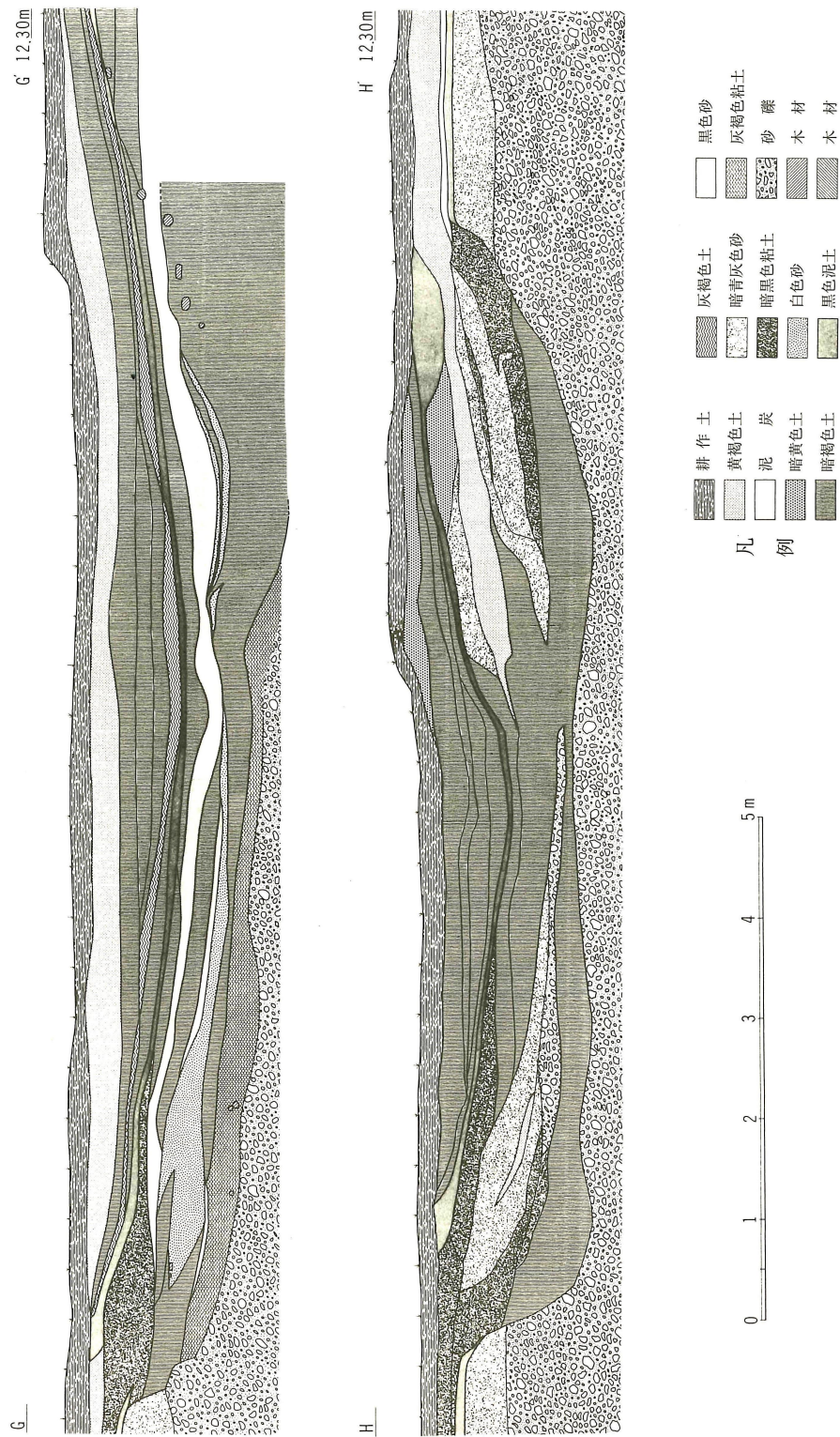
さて、河道は、現地表面下1.3～1.7mで基盤層をなす砂礫層の溝底に達するが、その南岸沿いの箇所が最も深くなっている。その深さは、現地表面下2.0～2.1mを測る。この河道の南岸沿いには、水勢を制御するためと思える



第21図 大溝断面実測図（縮尺1/75）



第22図 河道実測図（縮尺1/300）



第23图 河道断面实测图 (縮尺 1/70)



第24図 石積・木組両遺構実測図（縮尺 1/80）

2、3の施設が設けられている。

まず、9C区南岸には、石積遺構と木組遺構が存在する。石積遺構は、河道の斜面を覆う形で溝底から上端まで径10～25cmの礫多数を積み上げている。この石積遺構から、水流と鋭角をなす形で木組遺構が存在する。木組遺構は、それぞれ長さ3.64m・最大径0.13m、長さ4.3m・最大径0.08mの2本の棒を横軸とし、それに長さ0.65m・径0.06mから長さ1.6m・径0.16mのまでの棒約70本を立て掛けている。そして、縦の棒の下端に、それらの棒を押さえる形で遺存長2.38m、最大径0.13mのもう一本の横棒を配置している。木組遺構は、横軸の西端が石積遺構内に打ち込まれた杭を支点としている。他方、横軸の東端には、先端を削って尖らせた杭4本が存在するが、おそらくこれらの杭が支点をなしていたものと思える。

さらに、石積遺構から西方に延びる形で、径0.04～0.11mの杭13本が打ち込まれ、あるいは散乱している。この河道の西端は、河幅が19.5mと急に広がっているのであるが、杭列は河道の北岸に平行する形で延びている。なお、杭列から約2m北方にも、同様な大きさの杭2本が存在する。

すなわち、石積遺構は護岸施設、木組遺構は水勢を弱めるためのしがらみ、西方に延びる杭列は水の流れを変更させるためのしがらみの遺存部分であろう。

次に河道の埋土を説明すれば、ほぼ15層からなる。下層の埋土は、暗褐色土・砂と粘土の互層・砂礫層・砂層などからなる。中・上層の埋土は、灰色粘土層・灰色砂層・暗灰色土層・黒色（泥）土層・暗褐色土層・黄褐色土層などからなる。つまり、この河道は当初多少激しい水流があったが、深さの約1/2埋積後、きわめて緩やかな流れに変わったことを示している。

なお、この河道の9C区断面（第22図G-G'）でも¹⁴C年代測定用の試料を採取し、その結果

報告を受けているので列記する。

まず、河道北岸の自然堤防上に位置する黒色土は、B. P. 3080 ± 95 (1130B. C.) である (Code No. Gak - 4669)。次に、石積遺構内の杭は、B. P. 1390 ± 85 (A. D. 560) である (Code No. Gak - 4670)。その直上の黒色 (泥) 土は、B. P. 1720 ± 90 (A. D. 230) である (Code No. Gak - 4671)。

遺物は前述の木組遺構材・杭のほか、主として下層の埋土から一部弥生土器を含む土師器片 821 個、木器 10 個のほか、流木、禾本科植物を用いたと思える編物など若干が出土している。

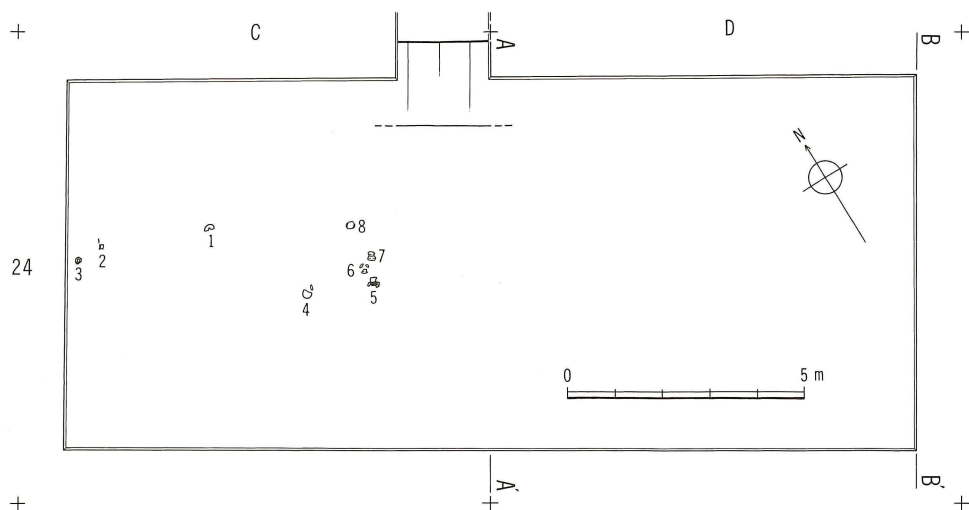
低湿地 (図版第 17、第 25・26 図)

24 区南部以南で、本遺跡の所在する自然堤防に南接する地区で検出。

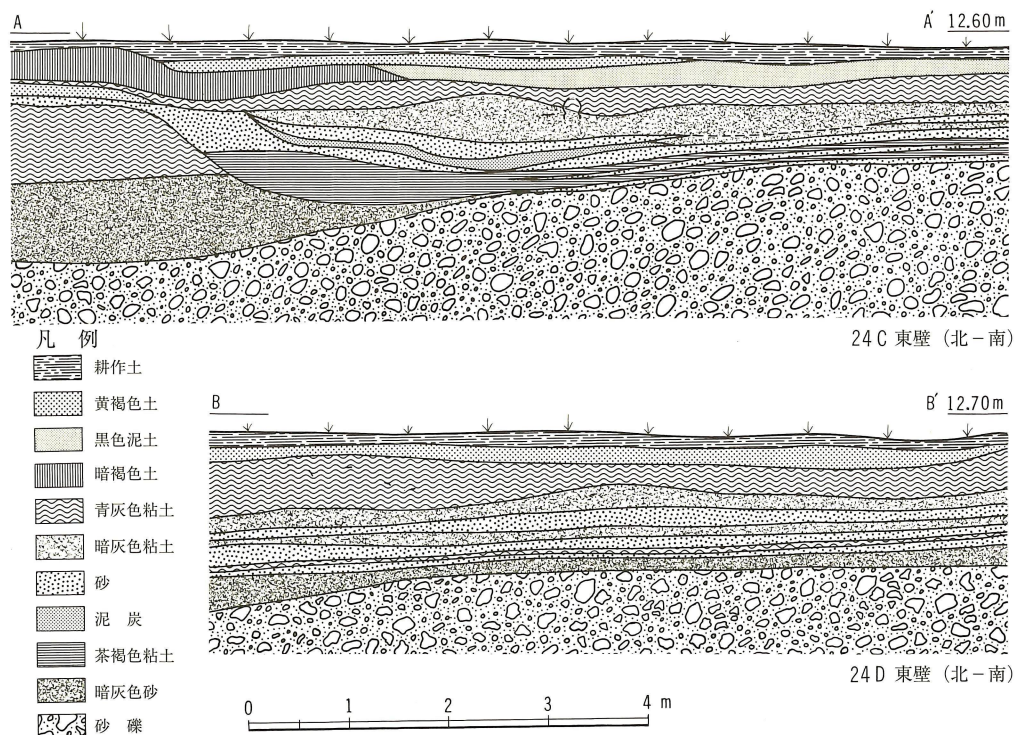
第 I 章の調査の経過でも記したが、この箇所が低湿地であって、大溝や河道でないことは、より南方の路線内における掘削工事実施時に立ち会い、土層観察することで確定しえた。ただし、発掘箇所の南東には、約 100 m の間隔を置いてやはり古墳時代に属す鴨引遺跡が所在するので、その中間部には足羽川の分流が流入し、河道が存在する可能性が強い (図版第 3)。

さて、この低湿地は、現地表面下 1.1 ~ 1.4 m で基盤層をなす砂礫層に達するが、その北岸すなわち自然堤防に南接する箇所が最も深くなっている。その深さは、現地表面下 1.6 ~ 1.8 m を測る。つまり、北西方に流下してきた足羽川の支流が、発掘箇所付近で自然堤防にぶつかって流れをやや速めたことが窺える。なお、ちなみに、24 区の南方 40 ~ 50 m の箇所では、現地表面下 50 cm 余りで砂礫層の連続を確認しており、この低湿地は北方が低く、南方に行くにつれしだいに高くなっていることが明らかである。

次に、自然堤防の南部の土層は、暗灰色砂層と青灰色粘土層からなる。自然堤防南端の上面は現



第 25 図 低湿地実測図 (縮尺 1/160)



第26図 低湿地断面実測図 (縮尺 1/75)

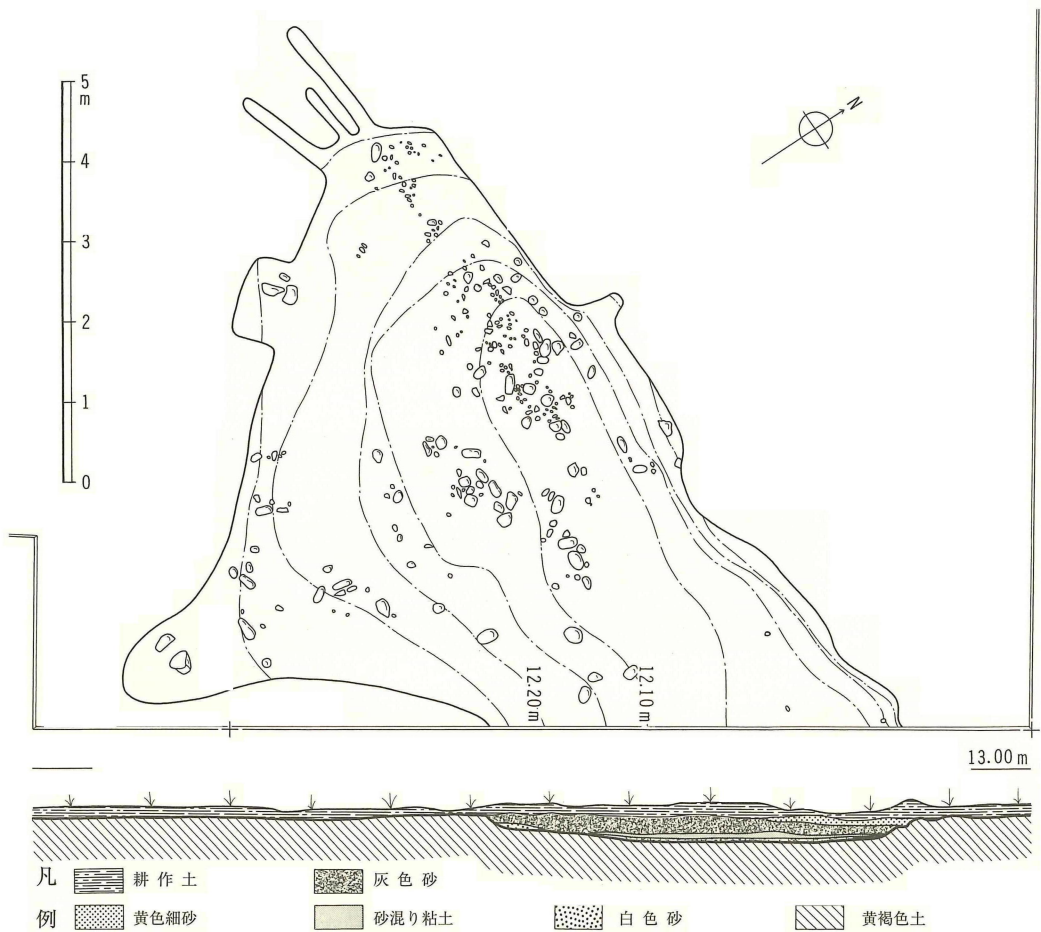
地表面下約65cmを測り、この上面は15～17 E・F区の縄文時代後期遺構の検出面に相応すると思える。ただし、度重なる検証にも確認しえなかったが、竪穴住居や窪地など古墳時代遺構の検出面が表土層直下の黄褐色土層上面であるにもかかわらず、その面に連続すると思える暗褐色土層上面は、古墳時代の低湿地堆積土層上面に連続しない。

改めて低湿地の調査結果を説明すれば、その埋土は9～13層からなる。埋土の中・下層は、砂(細砂)層と粘土層の互層からなる。大溝や河道の埋土とは異なり、低湿地の埋土に砂礫層や砂(粗砂)層を含まないので、その埋積時には水流が比較的穏やかであったことを示している。そして、土師器を主とする遺物は、3～5層の青灰色粘土層・暗灰色粘土層に包含されている。その直下の砂層には、ごくわずかの炭化粒を含むに過ぎない。すなわち、古墳時代に低湿地における上部埋積層は、この3～5層であろう。

遺物は、24 C・D両区にその大部分が集中する。24 B・E両区でも遺物包含層までの発掘を実施したが、出土個数は激減している。また、24 D区西部では、第3層の黑色泥土層において、長径10cm前後の礫(河原石)約100個が群集して出土している。主な出土品には、土師器片7,116個、土玉・砥石各1個がある。

窪地 (図版第18、第27図)

18 E区、自然堤防の中央部で検出。



第 27 図 窪地実測図

平面形が不整形で、浅皿状の窪地である。検出部分の長さ11.6m、最大幅7.6m、深さ約0.3mを測る。この遺構は、雨水の浸食によって形成されたもので、西方より東方にかけてその深さを増している。

埋土は、その大部分が砂層であって、底面には多数の礫が散在している。出土品には、土師器片2,678個がある。(中司)

3 平安時代

A 概要

そもそも平安時代の遺構はきわめて少ない。これらの遺構は、表土層の直下で検出できた。そして、平安時代の遺構の埋土は、黒色を呈する。ただし、後に述べる本時代と推定した全遺構から遺物が出土しているわけではないので、その点に問題を残す。しかし、出土品の存在しない遺構でも、その一部は埋積のほぼ終了した河道や低湿地の埋土上層に掘り込んでおり、かつ、平安時代の須恵器を出土した遺構と全く同色・同質の埋土をもつので、その点で時代を推測する根拠とした訳である。

調査の結果検出した主な遺構は、溝7条である。

さて、これらの溝は、調査範囲の南・北两部分にのみ散在する。このように溝だけを散見しうる理由は、今一つ明確ではない。それでも、平安時代の遺物の個数が、須恵器片わずか60個を数えるに過ぎないので、調査区内におけるこの時代の遺構は、もともと希薄であったことが窺えよう。

なお、各溝は、検出順に号数をつけて呼び分ける。

B 遺構

1・2号溝（図版第18、第28図）

23・24 E区、自然堤防の南端で検出。

浅い東西溝である。1条の溝が東部で分岐し、2条の溝となって西流する。検出部分の長さ約5.5m、幅1.1m、深さ0.2mを測る。

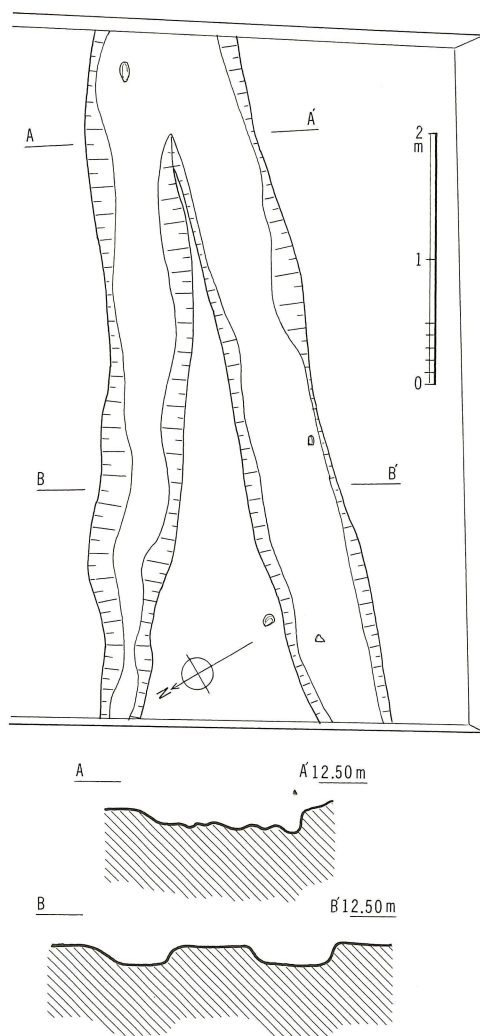
北方に位置する1号溝は、検出部分の長さ約4.7m、幅0.3～0.7m、深さ0.15mを測る。一方、南方に位置する2号溝は、検出部分の長さ約5.0m、幅0.55～0.75m、深さ0.2mを測る。

遺物は、2号溝から須恵器坏片1個のほか、1・2号溝から礫各1個が出土している。

3号溝

24 C区、低湿地の埋土上で検出。

緩い曲線を描いて延びる東西溝である。検出部分の長さ約7.0m、幅1.6～1.9m、深さ0.3mを測る。出土品は存在しない。



第28図 1・2号溝実測図（縮尺1/60）

4号溝

22 B・C、23 C区、自然堤防の南部で検出。

断続的な弧を描く、浅い不整円形溝である。円の内径11.6 m、幅0.45～0.70 m、深さ0.15 mを測る。土師器片1個が出土しているが、混入と思える。

5号溝

10 C区、自然堤防の北部で検出。

浅い東西溝である。検出部分の長さ約5.5 m、幅1.0～1.3 m、深さ0.15 mを測る。出土品は存在しない。

7号溝

9 D・E、10 D区、自然堤防の北端から河道の埋土上にかけて検出。

緩い曲線を描いて湾曲する浅い東西溝である。検出部分の長さ約18.0 m、幅0.7～1.7 m、深さ0.15～0.3 mを測る。出土品は存在しない。(中司)

4 室町時代

A 概要

今回の調査で最も多く検出できたのが、室町時代の遺構である。これらの遺構は、古墳・平安時代の遺構とともに、耕作土の直下で検出できたものである。しかし、他の時代の遺構の埋土が暗褐色・黒色を呈するのに対して、本時代の遺構の埋土はいずれも灰色を呈しており、その点識別がきわめて容易であった。

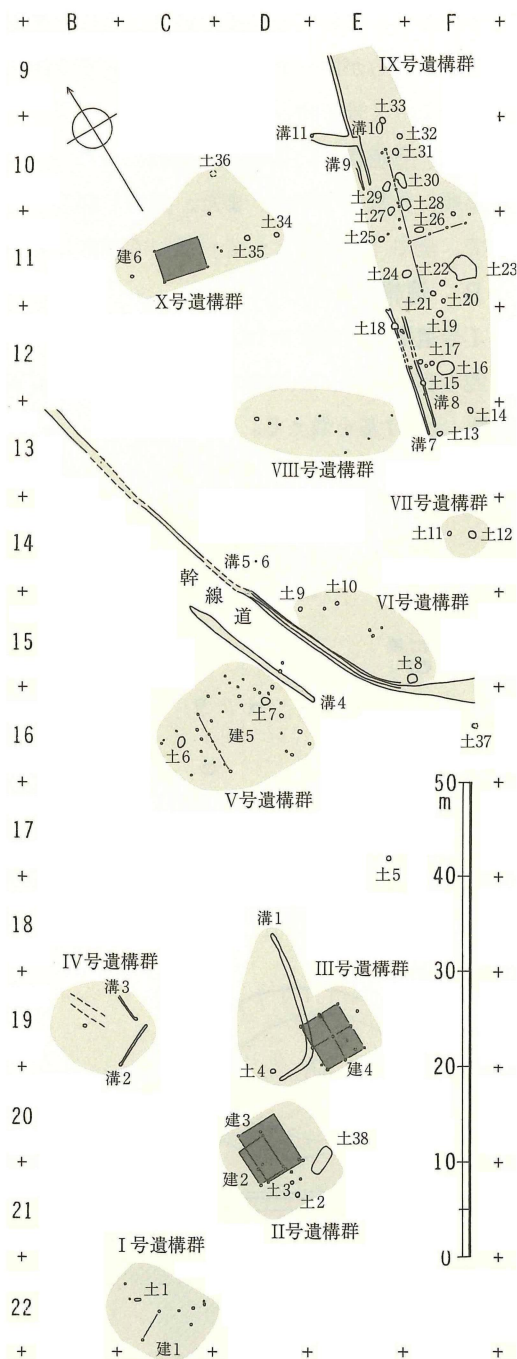
調査の結果検出した主な遺構は、次のとおりである。

- (1) 道 路 1条 (2) 掘立柱建物 6棟
(3) 掘立柱塀 2条 (4) 溝 11条
(5) 土 塋 38基

さて、これらの遺構は、調査範囲の大部分にあたる9～22区に散在する。そして、それより北方や南方には広がっていない。これは、当時既に古墳時代の低湿地や河道が埋積されていたのであるが、依然として居住には適さぬ、やや湿潤な土地であったためと思える。

一方、遺構分布の東西限は、今回は確定しえなかった。ただ、調査地区の南西部は分布密度が希薄であり、遺跡の範囲が西方に大きく広がっているとは考えにくい。それに対して、調査地区の北東部では遺構が密集しており、かつ、調査区端まで分布しているので、さらに東方まで広がる可能性がきわめて高い。

ところで、発掘区内における室町時代の遺構の分布密度は各区ともほぼ均一ではなく、発掘区の中央部を東西に横断する道路を挟んで、南北各5箇所ずつ、計10箇所に偏在しており、それぞれ群をなしている。各遺構群は、それぞれ若干の掘立柱建物とそれに付随する形の土塋からなり、さらには一部の遺構群には溝



第29図 室町時代遺構分布図 (縮尺 1/800)

が伴っている。掘立柱建物の存在を確定するに至らなかった遺構群もあるが、それらは部分的な発掘のためか、あるいは攪乱・削平によるものとみなすのが穏当である。

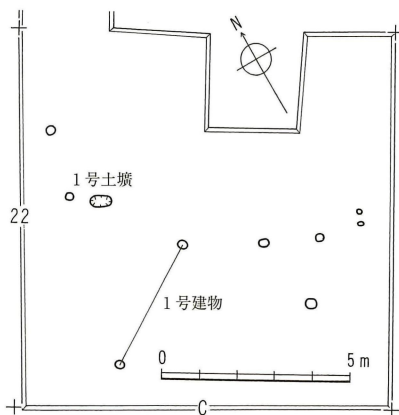
すなわち、これらの各遺構群は、それぞれ掘立柱建物とそれに付随する排水溝・土塋からなり、それらが同一箇所において数度ずつ作り替えられたものと思える。そこで、それらを遺構群ごとにⅠ～Ⅹ号と呼び分ける。

なお、各遺構群の番号は、報告にあたって若干の整理を行ったが、平安時代の例などと同様に、検出順に号数をつけた。また、井戸と溜桝・その他の土塋では、用途の識別が困難な例が混在するので、全て「土塋」として一括して呼称している。その点を留意されたい。

B 遺構

Ⅰ号遺構群（図版第19、第30図）

22C区で検出。室町時代遺構群の南端に位置する。検出遺構は、掘立柱建物1棟、その他の柱穴7個、土塋1基を数える。



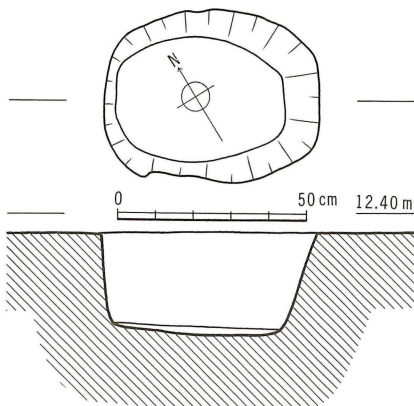
第30図 Ⅰ号遺構群実測図（縮尺1/200）

Ⅰ号掘立柱建物（図版第19、第30図）

Ⅰ号遺構群の南部に位置する。柱間3.56mを測る建物の、北辺あるいは南辺のみ確定しえた。柱穴9個のうちこの2個は、その形状からみて、同一建物の柱穴であることが確実である。ただし、その他の柱穴が不明であって、その存在が予想される箇所も拡張・精査したが、検出に至っていない。しいて復原すれば、最南端に位置する1個がその可能性を残す。そうであれば、南北棟（N-32°30'-W）建物で、1間（3.75m）×1間（3.56m）であろう。

Ⅰ号土塋（図版第19、第31図）

Ⅰ号遺構群の西部で、建物の北方に位置する。平面形が不整楕円形を呈し、他の大部分の土塋とは異なるきわめて浅い土塋である。上端の長径57cm、同短径45cm、下端の長径44cm、同短径33cm、深さ27cmを測る。塋底は湧水層に達していない。埋土に有機物をほとんど含まず、その中から土師質土器小皿1個、モモの核2個、塋底から柄杓1個が出土している。



第31図 Ⅰ号土塋実測図（縮尺1/20）

Ⅱ号遺構群（図版第19・20、第32図）

20・21両区で検出。室町時代遺構群の南部に位置する。検出遺構は、掘立柱建物2棟、その他の柱穴3個、土塋3基（うち火葬墓1基）と、内部に礫3個をもつ浅い窪

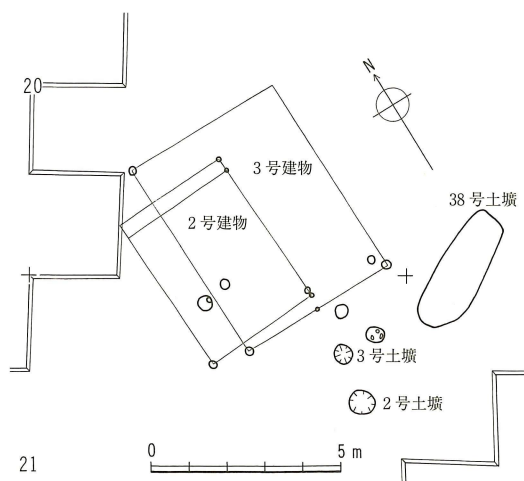
み1個を数える。重複する掘立柱建物2棟とその南方で並列する土塋2基とは、それぞれいずれかがセットになるものと思えるが、その並行・先後関係については不明である。また、それらと火葬墓の関係についても不明である。

2号掘立柱建物（図版第19、第32図）

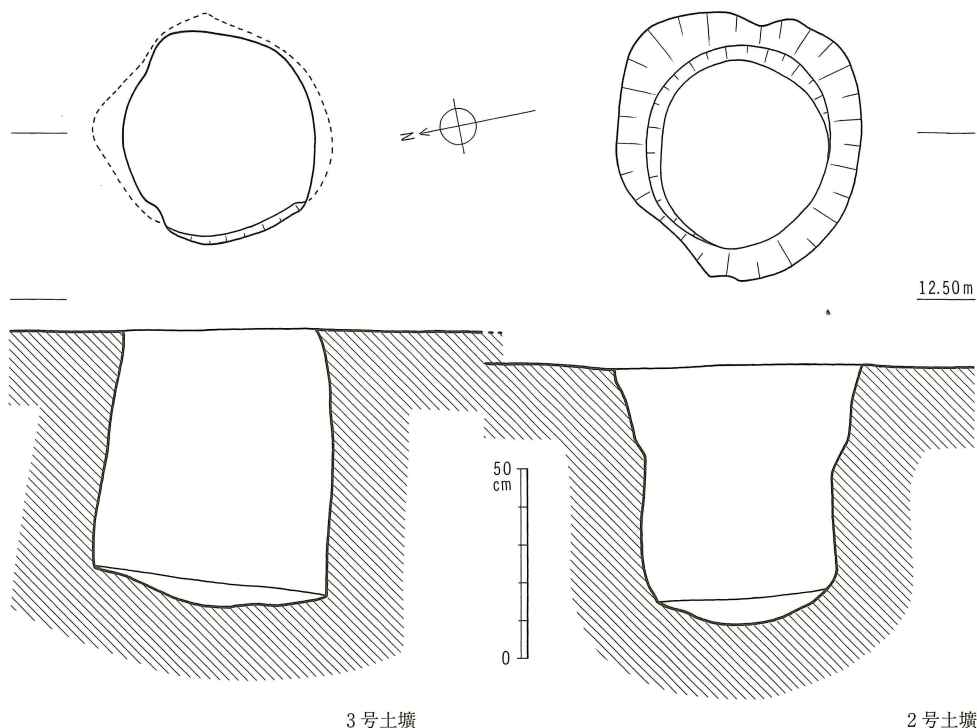
Ⅱ号遺構群の西部に位置する。1間（4.10m）×1間（3.15m）の南北棟（N-4°-W）建物である。ただし、建て替えが行われており、東辺柱列にはそれぞれに北接するもう1個の柱列が並ぶ（柱間4.36m）。なお、北西の柱穴は調査範囲を拡張し精査したが、検出に至っていない。本建物のほぼ中央に位置する柱穴から曲物断片若干が出土している。

3号掘立柱建物（図版第19、第32図）

Ⅱ号遺構群の西部に位置し、2号掘立柱建物と重複する。1間（5.80m）×2間（4.25m）のより大型で、棟方向をほぼ同じくする南北棟（N-3°-W）建物である。この建物も建て替えられたものらしく、南東隅の柱穴に北接してもう1個の柱穴が存在する。なお、北東隅の柱穴



第32図 Ⅱ号遺構群実測図（縮尺 1/200）

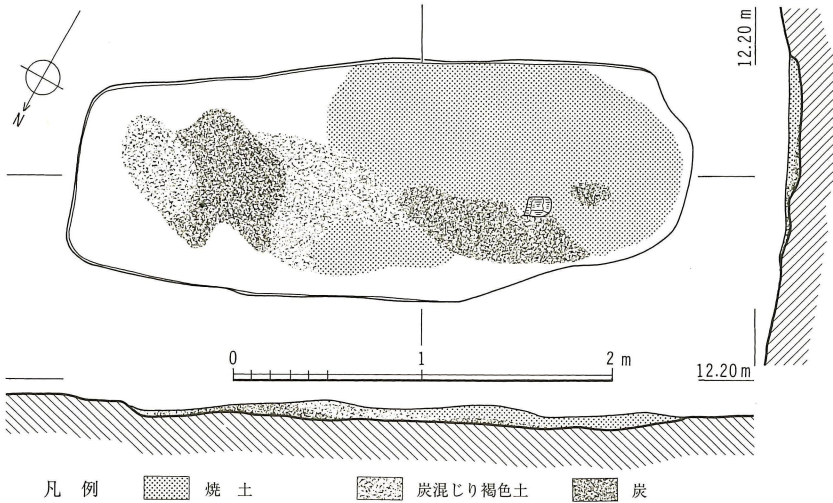


第33図 2・3号土塋実測図（縮尺 1/20）

は検出に至っていない。

2号土壙（図版第20、第33図）

Ⅱ号遺構群の南部で、建物の南方に位置する。本来は円筒形の土壙であるが、上端部が崩壊で広がっている。上端の径65～71cm、下端の径50cm、深さ68cmを測る。壙底は湧水層に達しておら



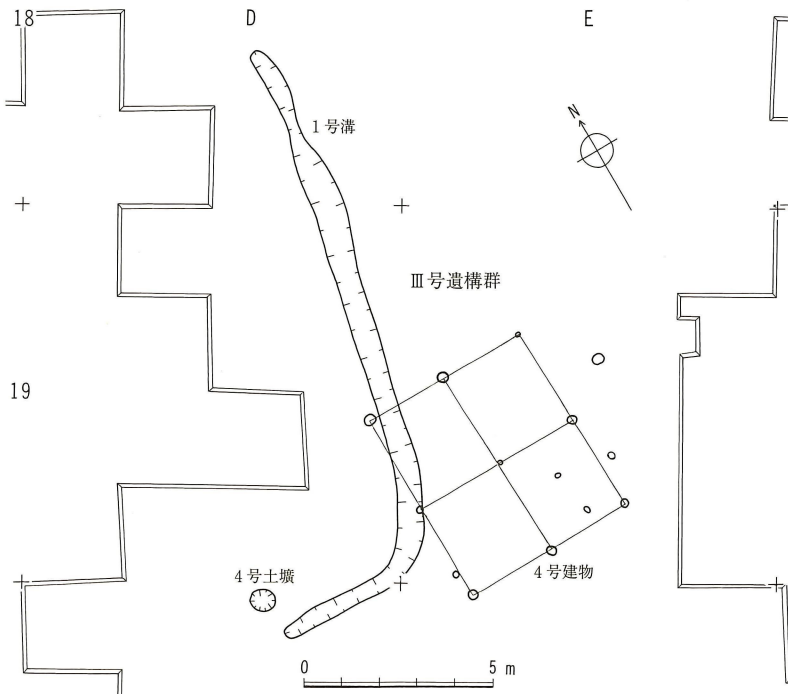
第34図 38号土壙実測図（縮尺1/40）

ず、壁面下部の崩壊もない。埋土下部に多量の有機物を含むほか、砥石2個、モモの核90個が出土している。

3号土壙（図版第20、第33図）

Ⅱ号遺構群の南部で、建物の南方に位置する。円筒形の土壙であるが、乾燥による壁面下部の柱状剥離のため、やや裾広がりとなっている。

上端の径51～54cm、下端の径57～62cm、深さ72cmを測る。壙底は湧水層に達していない。埋土下部に多量の有機物を含むほか、越前焼甕1個、曲物断片1個、薄板・焼けた木材・木の枝の各断片若干と、モモ・ウメの核各1個などが出土している。



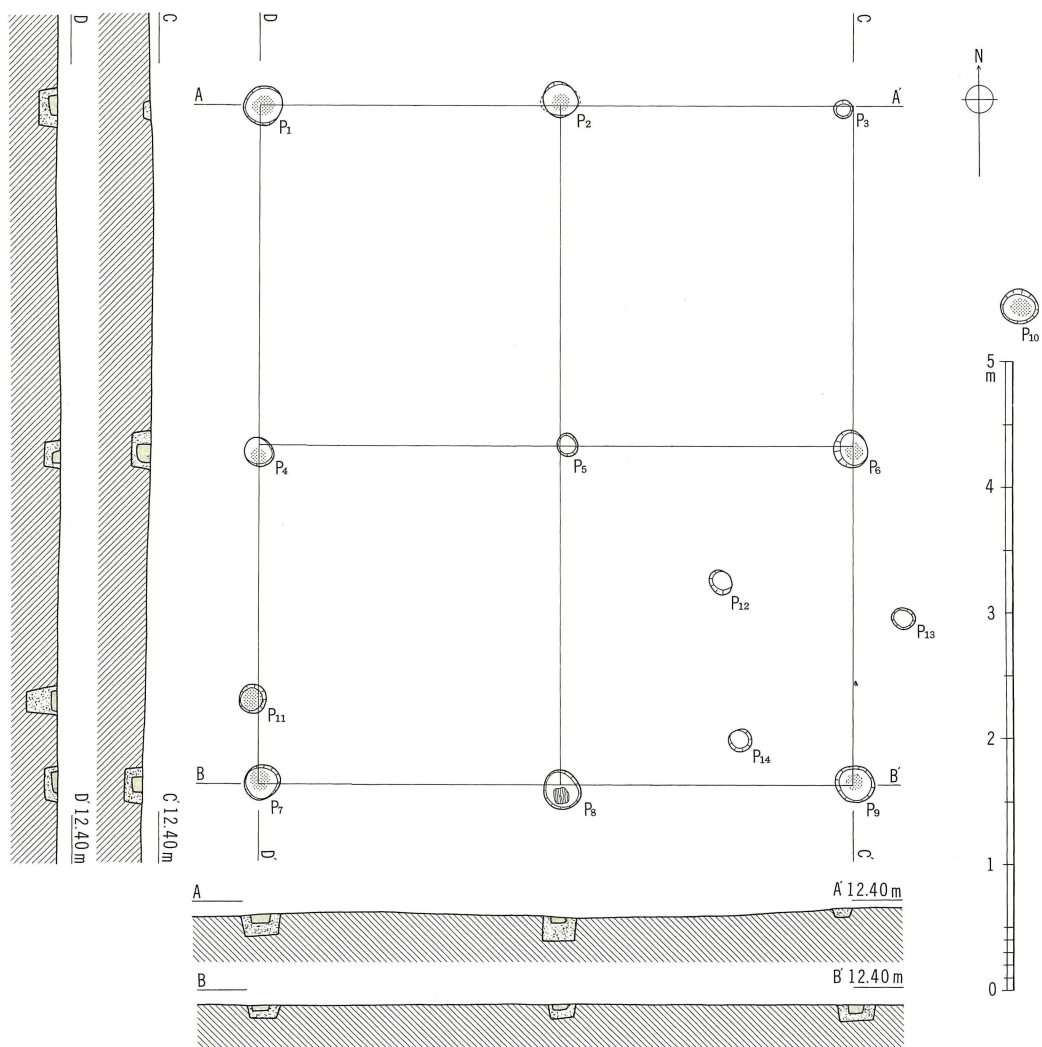
第35図 Ⅲ号遺構群実測図（縮尺1/200）

38号土壙（図版第20、第34図）

Ⅱ号遺構群の東部で、建物の東方に位置する。平面形が隅丸長方形の火葬墓である。全長325cm、最大幅128cm、深さ7cmを測る。土壙内には焼土や炭が充満するほか、土師質土器小皿片1個が出土している。なお、その位置からⅡ号遺構群に含めたが、検出面は他の遺構より16～22cm下位であって、その点に若干の問題を残す。

Ⅲ号遺構群（図版第21・22、第35図）

18～20 D・E区で検出。室町時代遺構群の南部に位置する。検出遺構は、掘立柱建物1棟、その他の柱穴5個、溝1条、土壙1基を数える。掘立柱建物と溝が重複するが、この溝は、南北部分が掘立柱建物2～4の棟方向とほぼ一致することや、あたかも土壙を取り囲むように西に曲がっていることから、建物に東・南接する溝である可能性を想起させる。ただ、溝に西接する地区には、



第36図 4号掘立柱建物実測図（縮尺1/60）

予備調査時の第7トレンチなどがあって、建物の有無の検証は不可能であった。

4号掘立柱建物（図版第21、第36図）

Ⅲ号遺構群の東部に位置する。2間（5.40m）×2間（4.72m）で、南北棟（磁北）の総柱建物である。南辺中央のP₈には礎板が遺存する。そのほか、柱穴から砥石1個、モモの核片若干が出土している。なお、4号掘立柱建物およびその近辺の柱穴で、柱痕径の判明する例を第1表に示した。

第1表 Ⅲ号遺構群柱痕径一覧表（単位cm）

P ₁	18	P ₆	14	P ₉	13
P ₂	14	P ₇	16	P ₁₀	16×14
P ₄	12	P ₈	12	P ₁₁	16

1号溝（図版第21、第35図）

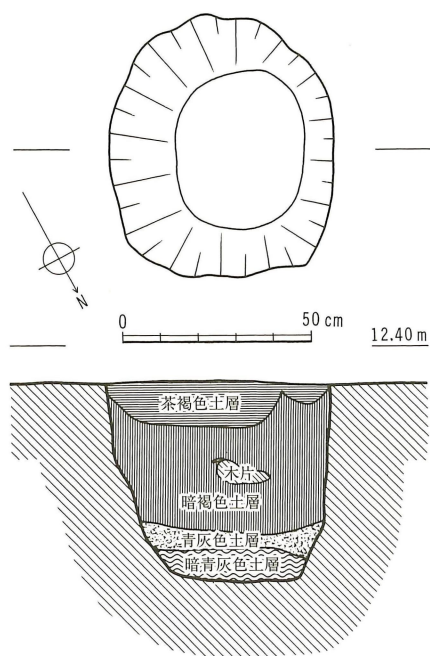
Ⅲ号遺構群の西部に位置する。平面形が逆L字形の溝である。南北長約14.3m、東西長約4.3m、幅0.6～0.8m、深さ0.1～0.2mを測る。出土品は存在しない。既述のように、おそらく建物に伴う外周の排水溝であろう。

4号土塋（図版第22、第37図）

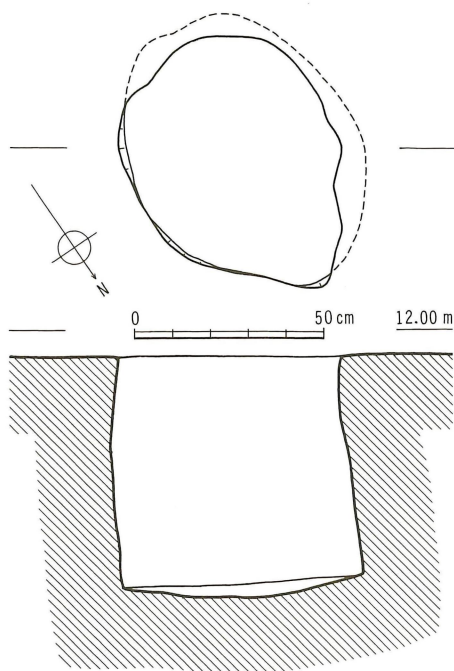
Ⅲ号遺構群の西部で、1号溝の西方に位置する。平面形が不整楕円形を呈し、下部はしだいにすぼまる土塋である。上端の長径70cm、同短径59cm、下端の長径42cm、同短径34cm、深さ53cmを測る。塋底は湧水層に達しておらず、壁面下部の崩壊もない。埋土に多量の有機物を含むほか、土師質土器小皿片1個、木の枝片若干が出土している。

Ⅳ号遺構群（第29図）

19B・C両区で検出。室町時代遺構群の南部に位置する。検出遺構は、柱穴1個、溝2条を数える。



第37図 4号土塋実測図（縮尺 1/20）



第38図 5号土塋実測図（縮尺 1/20）

そのほか、攪乱のため不詳であるが、あるいは溝かと思える遺構1条がある。攪乱を受けた地区が溝に西接し、たとえ1個とはいえ柱穴が検出できているので、この箇所には掘立柱建物が存在していた可能性がきわめて強いといえる。

2号溝

Ⅳ号遺構群の東部に位置する。きわめて細い東西溝である。南北長約4.3m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。出土品は存在しない。

3号溝

Ⅳ号遺構群の東部に位置する。きわめて細い南北溝である。一部分の検出にとどまるが、長さ3.6m、幅約0.2m、深さ約0.1mを測る。出土品は存在しない。

次に、遺構群を構成しないが、17E・16F両区で土壌各1基を検出している。これらは、本来隣接して存在していた柱穴群（掘立柱建物）と各々同一遺構群を構成していたが、柱穴群が削平された可能性が考えられる。また、後者は発掘区東端の検出であるので、あるいは区域外に東接する遺構が存在しており、それらと遺構群をなす可能性がある。さらに、この2基の土壌が同一の遺構群に属し、その中間部に存在していた柱穴群が削平された可能性も残る。

5号土壌（第38図）

Ⅲ・Ⅴ号遺構群の東方に位置する。平面形が不整の長円形を呈する土壌である。上端の径55～73cm、下端の径58～77cm、深さ64cmを測る。壙底は湧水層に達するが、壁面下部の崩落はほとんどない。埋土は単一土層で有機物を含まず、出土品も存在しない。ごく短期間の井戸かその他の用途の土壌であろう。

37号土壌

Ⅴ号遺構群の東方に位置し、縄文時代の7号遺構と重複する（図版第10、第17図）。部分的な検出にとどまるが、平面形は隅丸方形を呈するものと思える。上端の西辺長50cm、下端の西辺長43cm、深さ95cmを測る。壙底は湧水層に達しておらず、壁面下部の崩落もない。埋土に多少の有機物を含むが、出土品も存在しない。

Ⅴ号遺構群（図版第22～24、第39～41図）

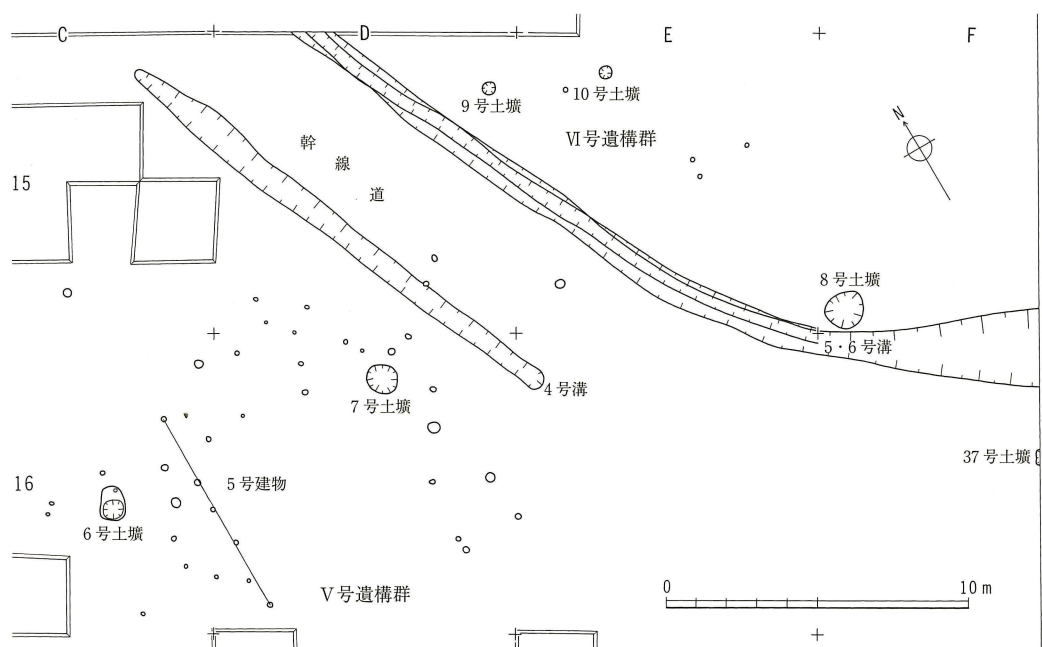
15D、16C・D区で検出。室町時代遺構群の南部に位置する。検出遺構は、掘立柱建物1棟、その他の柱穴36個、土壌2基を数える。柱穴の数やその分布状況からみても、掘立柱建物の建て替えが行われたことが確実であるが、2基の土壌との並行・先後関係については不明である。

5号掘立柱建物（図版第22・23、第39図）

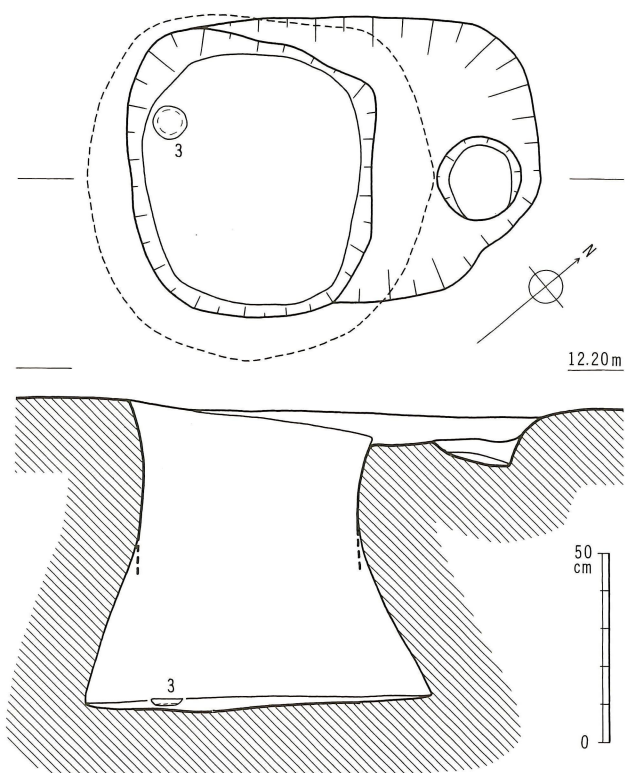
Ⅴ号遺構群の中央部に位置する。3間(7.2m)の南北柱列であるが、おそらく南北棟(N-30'-E)建物の西辺であろう。

6号土壌（図版第23、第40図）

Ⅴ号遺構群の西部で、建物の西方に位置する。平面形が隅丸長方形で、二段掘りの井戸である。上端の長径108cm、同短径79cm、下端の径90～91cm、深さ80cmを測る。上段の掘り込みは深さ約



第 39 図 V・VI号遺構群実測図 (縮尺 1/250)



第 40 図 6号土壙実測図 (縮尺 1/20)

10cmで、その中央部にはピット1個が存在する。壙底は湧水層に達し、壁面下部は崩落のため裾広がりとなっている。埋土に多少の有機物を含むほか、その中から土師質土器小皿・皿片64個、東播磨系こね鉢片2個、杭片1本、竹片若干が、また、上段ピット底や下段壙底から土師質土器小皿がそれぞれ1個出土している。

7号土壙 (図版第24、第41図)

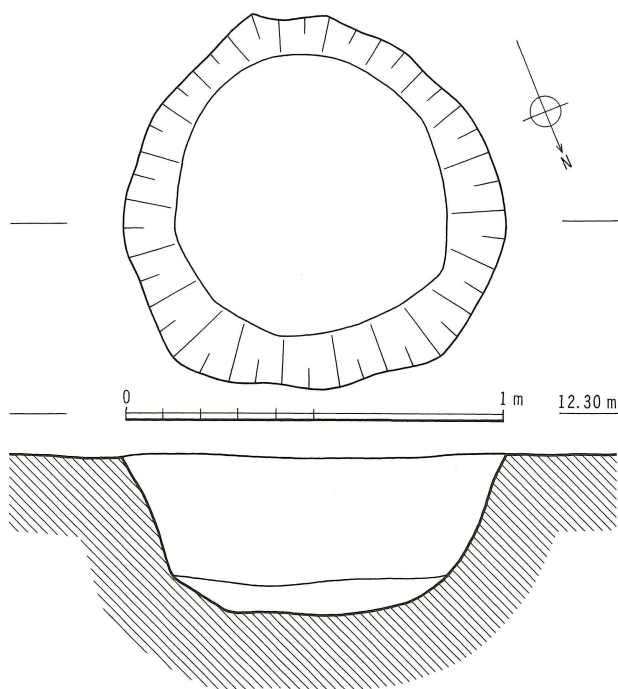
V号遺構群の東部で、建物の東方に位置する。半球形を呈する土壙である。上端の径99～101cm、下端の径71～75cm、深さ42cmを測る。壙底は湧水層に達していない。埋土に多少の有機物を含むが、出土品は存在しない。

道路（図版第22、第29・39図）

13B区から16F区にかけて検出（第29図）。室町時代遺構群を南北に二分する形で中央部に位置する。検出遺構は、溝3条を数える。平行して東西に延びる溝とその中間域の無遺構地区に過ぎないけれども、上述のように集落を二分する形で、自然堤防に沿ってその中央部を縦走する形で延びており、まず道路と考えるべきであろう。

幹線道（図版第22、第39図）

道路の北界を限る形で重複する2条の溝が、同じく南界を限る形でやや短い1条の溝が、平行して延びている。検出部分の長さ約55m、幅4.0～4.2mを測る。無遺構地区といっても、一部には柱穴2個と土壌1基（37号土壌）



第41図 7号土壌実測図（縮尺1/20）

が重複している^①ので、路線や幅員の変更など、若干の時期的変遷があったのかも知れない。後述するが、本遺跡ではこのほかにも、この道路からⅨ号遺構群に至る道路（枝道）も想定復原しうる。本遺構の幹線道のように集落を二分する形の道路は、当時の足羽川右岸の各集落を結ぶ道であろう^②。

4号溝（図版第22、第39図）

幹線道に南接する浅い東西溝である。全長約18m、幅0.6～1.0m、深さ0.2cmを測る。幹線道の南縁の側溝である。出土品は存在しない。

5号溝（第39図）

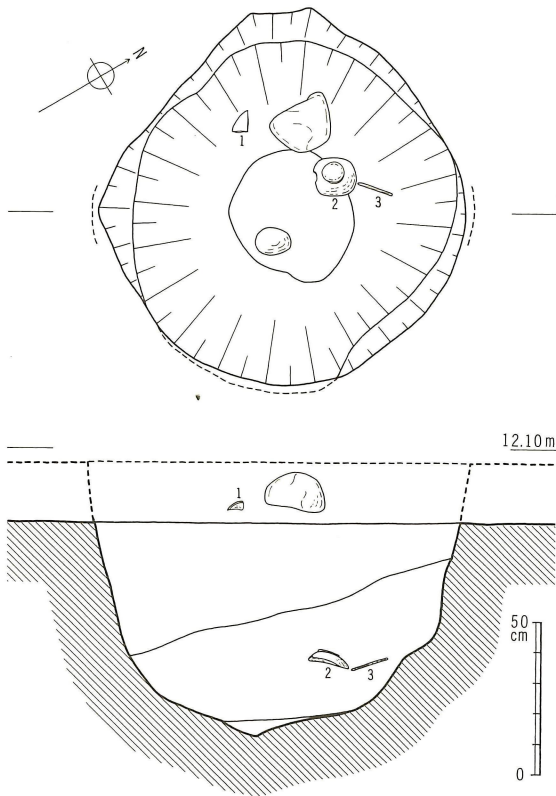
幹線道に北接する浅い東西溝である。検出部分の長さ約55m、幅0.5～2.6m、深さ0.15～0.30mを測る。幹線道の北縁の側溝であって、重複する6号溝より先行する。埋土からスリ鉢片1個が出土している。

6号溝（第39図）

やはり幹線道に北接する浅い東西溝であって、5号溝と重複する。検出部分の長さ約18m、幅0.4～0.5m、深さ0.15mを測る。幹線道の北縁の側溝であって、5号溝が埋没後掘削したものである。

Ⅶ号遺構群（図版第24～26、第39・42～44図）

15D～F区にかけて検出。室町時代遺構群の北部に位置する。検出遺構は、柱穴4個、土壌3基を数える。遺構群の内外に攪乱があって、掘立柱建物の復原に不詳な点が多いが、群の中央部に位



第 42 図 8 号土壙実測図（縮尺 1/25）

置するのであろう。

8号土壙（図版第24、第42図）

Ⅵ号遺構群の南部に位置する。上部を欠失する半球形の土壙である。上端の径121～123cm（同復原径約126cm）、下端の径41～43cm、深さ70cm（同復原約90cm）を測る。壙底は、最下端がかろうじて湧水層に達している。埋土に多くの有機物を含むほか、上層から漆器椀片1個（第42図1）、礫2個が、下層から木椀1個（同図2）、折敷側板辺1枚（第42図19）が出土している。

9号土壙（図版第25、第43図）

Ⅵ号遺構群の北部に位置する。二段重ねの曲物製の井側をもつ井戸である。曲物は、多少ゆがんでいるが、口径45cm前後（土壙の上端径46～48cm）、曲物上端から壙底までの深さ107cm（土壙の下端径73～75cm、深さ92cm）を測る。

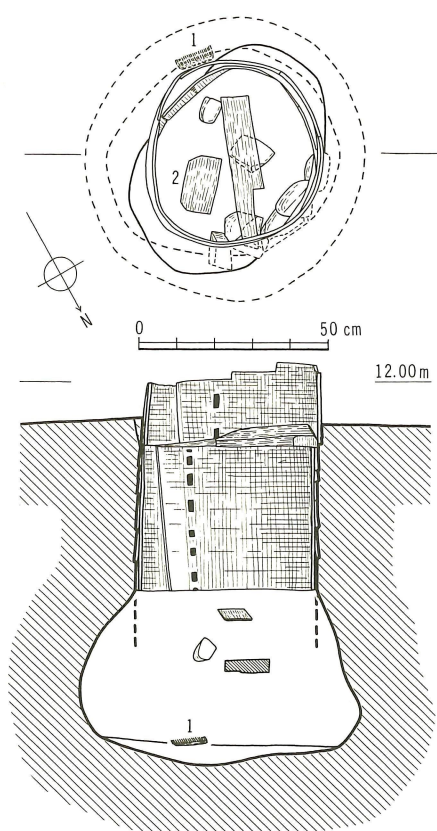
井側^③の構成をやや詳しく説明すれば、

下段の曲物は厚さ1cmの板を用いて径約45cm、高さ38cmの筒を作り、樺皮で綴じている。上段の曲物も全く同様な作りであるが、上端が欠損しており、遺存高24cmを測る。曲物の外側の綴じ目には、柂目の薄板3枚をわずかずつずらして縦にあてている。そして、さらにその外側を幅7.5～10.0cm、厚さ0.2～0.3cmの柂目の薄板で巻き、その端部を樺皮で綴じて輪（すなわち曲物）を作っている。このような輪を少しずつ重ねながら、曲物の下端から上端まで巻いている。つまり、本土壙の井側は、内側2段、外側8段の二重の曲物で作っているわけである。なお、上・下の曲物のずれを防ぐためか、接合部には縦の薄板1枚と、横の薄板2段を内側にはみ出させている。さらに、現状では、その機能を果たしていないのであるが、井側の沈下を防止するため、その下部に礫5個を据えている。

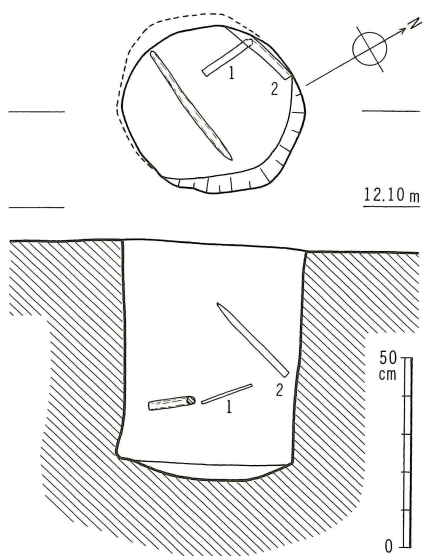
壙底は湧水層に達し、井側より下位の壁面は崩落のため袋状を呈する。埋土に多くの有機物を含むほか、下層から土師質土器小皿片4個、越前焼スリ鉢片4個、折敷底板片1枚（第43図2）、板材1枚、モモの核1個、礫2個などが、壙底から木櫛1枚（同図1）が出土している。

10号土壙（図版第26、第44図）

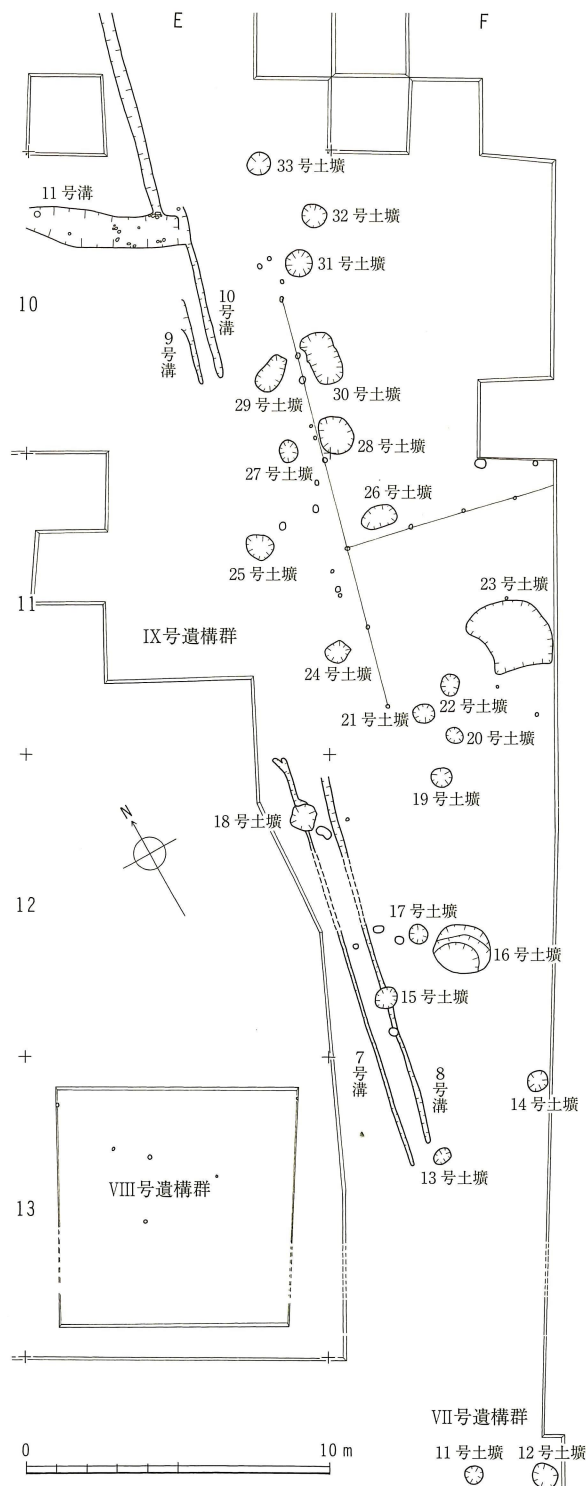
Ⅵ号遺構群の北部に位置する。円筒形の土壙である。上端の径44～48cm、下端の径43～46cm、深さ62cmを測る。壙底は湧水層に達しておらず、壁面下部の崩落もない。埋土下部に多くの有機



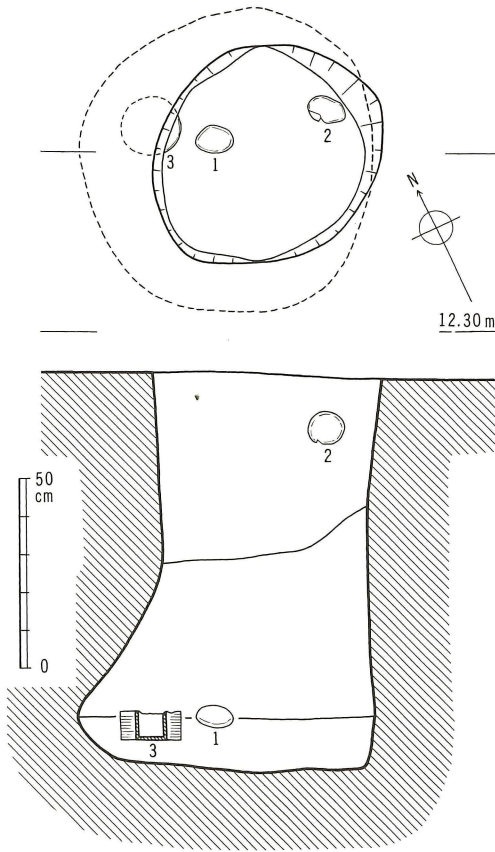
第43図 9号土壙実測図(縮尺1/20)



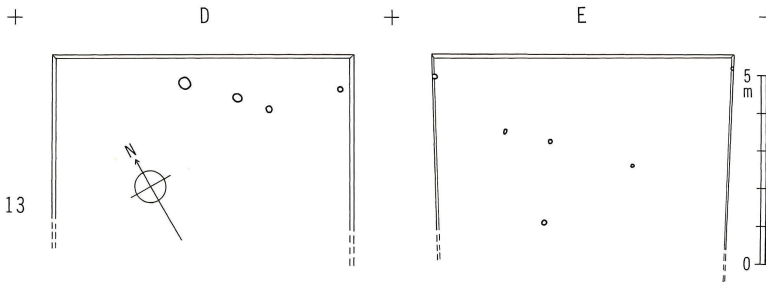
第44図 10号土壙実測図(縮尺1/20)



第45図 VII~IX号遺構群実測図(縮尺1/250)



第 46 図 11 号土壙実測図 (縮尺 1/20)



第 47 図 VII号遺構群実測図 (縮尺 1/200)

物を含むほか、中層からとめ串1本(第44図2)、下層から青磁碗片1個、折敷底板片1枚、木簡1枚(同図1)などが出土している。

VII号遺構群(図版第27、第45図)

14 F区で検出。室町時代遺構群の北部に位置する。検出遺構は、土壙2基を数えるのみである。発掘区の東端にあたるので、既述の37号土壙と同様に、区域外に東接して遺構が分布している可能性を考えねばならない。

11号土壙(図版第27、第46図)

VII号遺構群の西部に位置する。円筒形の井戸である。上端の径56～65cm、下端の径78～80cm、深さ105cmを測り、深さは本遺跡の土壙のなかでも最大である。壙底は湧水層に達し、壁面下部は西方に袋状に広がる。埋土に多くの有機物を含むほか、上層から漆器碗片1個(第46図2)、壙底から土師質土器小皿1個(同図1)、天目茶碗片1個、曲物容器1個(同図3)が出土している。

12号土壙(図版第27)

VII号遺構群の東部に位置する。円筒形の井戸である。上端の径85～90cm、深さ100cmを測る。

壙底は湧水層に達するが、壁面下部に顕著な崩落は見られない。埋土に多くの有機物を含むが、出土品は存在しない。

VIII号遺構群(第47図)

13 D・E両区で検出。室町時代遺構群の北部に位置する。検出遺構は、柱穴10個を数えるのみである。ただし、本遺構群に南接して農業用水路が、また、北接して建設工事に伴う付け替え用水路が設けられているので、これらの検出遺構は群内の一部に過ぎない可能性が大きい。

IX号遺構群(図版第27～36、第45図)

9 E区から13 F区にかけて検出。室町時代遺構群の北部に位置する。検出遺構は、柱穴23個、

掘立柱塀2条、溝5条、土壇21基を数える。一地区に最も遺構が集中する。群西部に南北溝が位置し、それと南北塀が平行し、また、土壇群もそれらと平行する形で分布しているので、これらは全て1箇所の屋敷に属するものと思える。すなわち、これらの検出遺構は、大型の屋敷の西部に相当するものであろう。

1号掘立柱塀（図版第27、第45図）

Ⅸ号遺構群の中央部に位置する。5間（14m）の南北（N-16°-E）塀である。この塀と西方の7～10号溝は平行するが、塀の全長は7・8号溝と9・10号溝の中間の距離にほぼ等しく、塀が溝の断絶部分にあって、あたかも補完関係をなしていたかの感がある。

2号掘立柱塀（図版第27、第45図）

Ⅸ号遺構群の中央部に位置し、1号掘立柱塀と直交する。3間（5.75m）以上の東西（N-102°-E）塀である。1号掘立柱塀より東方に、あたかも屋敷を二分する形で延びている。

7号溝（図版第27・28、第45図）

Ⅸ号遺構群の西辺南部に位置する。きわめて細長い南北溝である。全長14.2m、幅0.20～0.25m、深さ0.05～0.15mを測る。北方延長線上には、12.7mの間隔を置いて同じ南北溝の9号溝が存在するが、これと対応するものと思える。18号土壇と重複するが、それより後出の遺構である。出土品は存在しない。

8号溝（図版第27・28、第45図）

Ⅸ号遺構群の西辺南部に位置する。7号溝と0.6～0.9mの間隔を置いて東方で平行する。きわめて細長い南北溝である。北端が攪乱で消失しているが、検出部分の全長12.6m、幅0.15～0.25m、深さ0.05～0.15mを測る。やはり、北方延長線上に約14.0mの間隔を置いて同じ南北溝の10号溝が存在するが、これと対応するものと思える。15号土壇と重複するが、それより後出の遺構である。出土品は存在しない。

9号溝（図版第27、第45図）

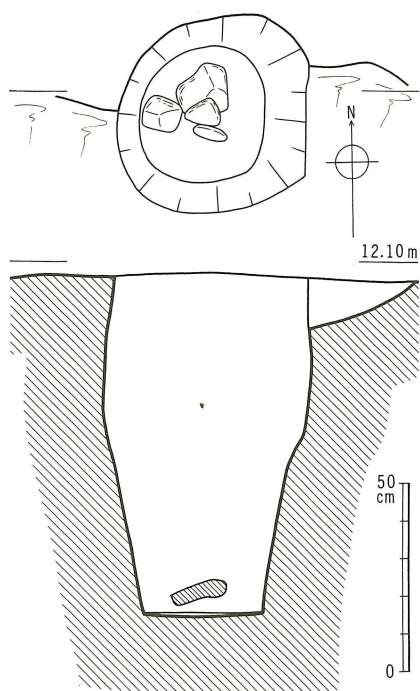
Ⅸ号遺構群の西辺北部に位置する。きわめて細長い南北溝である。中間と北部で消失しているが、検出部分の全長14.9m、幅0.15～0.45m、深さ0.05～0.15mを測る。断絶部分で11号溝と交差するが、それより先行する溝である。出土品は存在しない。

10号溝（図版第27、第45図）

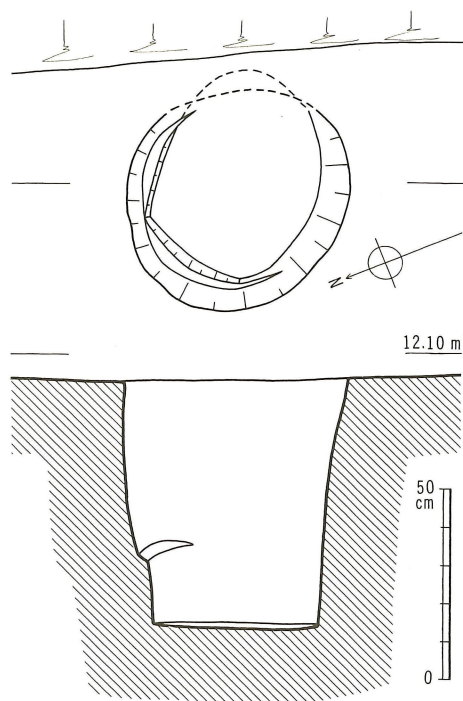
Ⅸ号遺構群の西辺北部に位置する。9号溝と0.5mの間隔を置いて東方で平行する、きわめて細長い南北溝である。北端が消失しているが、検出部分の全長5.8m、幅0.20～0.25m、深さ0.05～0.15mを測る。9号溝と同様に11号溝と交差するが、それより先行する溝である。出土品は存在しない。

11号溝（図版第36、第45図）

Ⅸ号遺構群の西辺北部に位置する。9・10号溝と交差しており、それらより後出の東西溝である。西端が消失しているが、検出部分の全長5.0m、幅1.0～1.2m、深さ0.15～0.20mを測る。溝の南北両端を中心に杭2本、礫15個余りが配置されている。多少の土師器片の混入があるが、遺構に伴



第 48 図 13 号土壙実測図（縮尺 1/20）



第 49 図 14 号土壙実測図（縮尺 1/20）

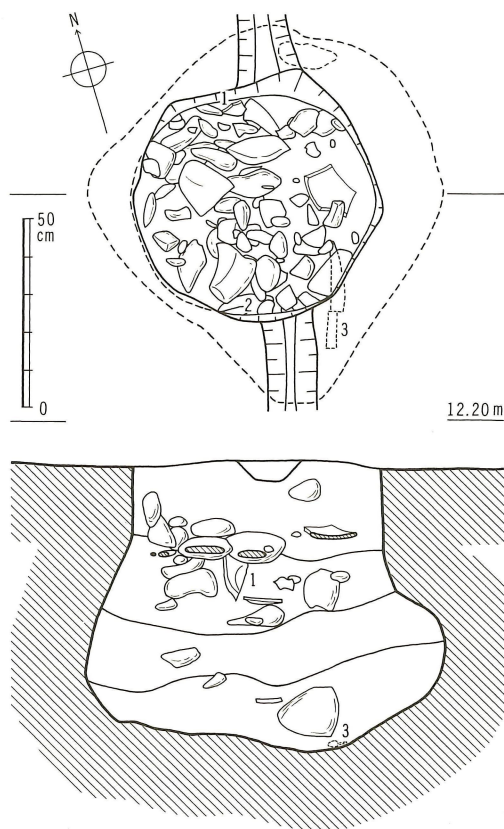
う出土品は存在しない。

13号土壙（図版第28、第48図）

Ⅸ号遺構群の西辺、8号溝の南方に位置する。下部がしだいにすぼまる円筒形の土壙である。上部の一部分を欠失するが、上端の径51～54cm、下端の径33～36cm、深さ91cmを測る。壙底は湧水層に達するが、壁面下部の崩落はない。埋土に多少の有機物を含むが、壙底から礫4個が出土したのみで、他の遺物は存在しない。

14号土壙（図版第28、第49図）

Ⅸ号遺構群の南部に位置する。上下二段からなり、上段は円筒形、下段は胴張りをもつ四角柱状を呈する土壙である。上端の径58～59cm、下端の径42～55cm、深さ67cmを測る。上段の深さは45cmを測る。上段には曲

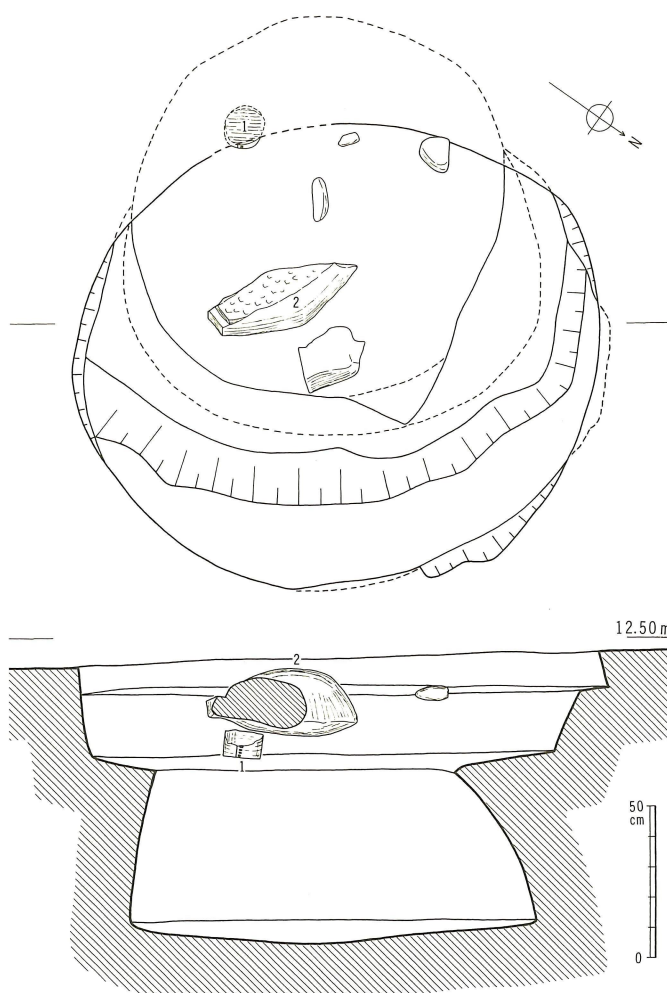


第 50 図 15 号土壙実測図（縮尺 1/20）

物を、下段には幅30cm強の板材で方形の木組みを設置していた感がある。墳底は湧水層に達するが、壁面下部には多少の崩落があって、四角柱状をなさぬ部分が見られるのみである。埋土に多少の有機物を含むが、出土品は存在しない。

15号土壙（図版第29、第50図）

Ⅸ号遺構群の西辺に位置し、8号溝と重複する。円筒形の井戸である。上端の径62～65cm、下端の径94～100cm、深さ77cmを測る。8号溝より先行する遺構である。墳底は湧水層に達し、壁面下部は崩落のため袋状を呈する。埋土に多少の有機物を含むが、何よりも礫多数が包含されており、廃棄後一時に埋め戻した感がある。礫に混じって上・中層から越前焼甕片3個、同スリ鉢片1個（第50図1）、石臼片1個（同図2）が、墳底から庖丁1本（同図3）が出土している。



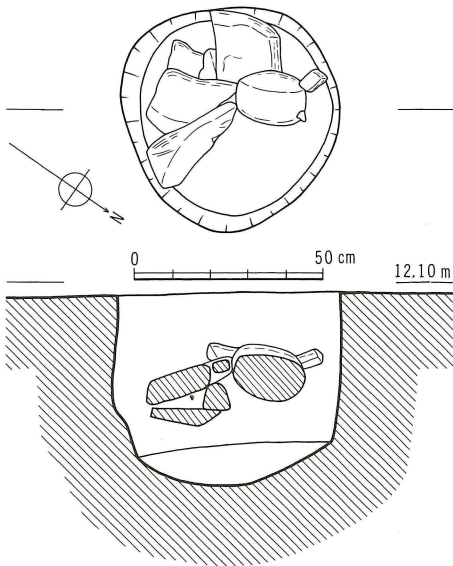
第51図 16号土壙実測図（縮尺1/25）

16号土壙（図版第29、第51図）

Ⅸ号遺構群の南部に位置する。平面形が円形で、三段掘りの大型井戸である。上端の径155～175cm、下端の径134～1138cm、深さ95cmを測る。上段の深さは10～14cm、下段の深さは50～60cmを測る。ただし、各段は同心円状に掘り込んだものではなく、上段から下段にかけて東から西に中心が移動している。墳底は湧水層に達し、壁面下部は崩落のため袋状を呈する。埋土に多少の有機物を含むほか、上層から用途不明の緑色凝灰岩製品断片1個（第51図2）、中段の墳底に相当する箇所では柄杓1個（同図1）などが出土している。

17号土壙（図版第29、第52図）

Ⅸ号遺構群の南部で、16号土壙に北接する。円筒形の土壙である。上端の径58～60cm、下端の径51～52cm、深さ51cmを測る。墳底は湧水層に達しておらず、壁面下部の崩落もない。埋土に多



第 52 図 17 号土坑実測図 (縮尺 1/20)

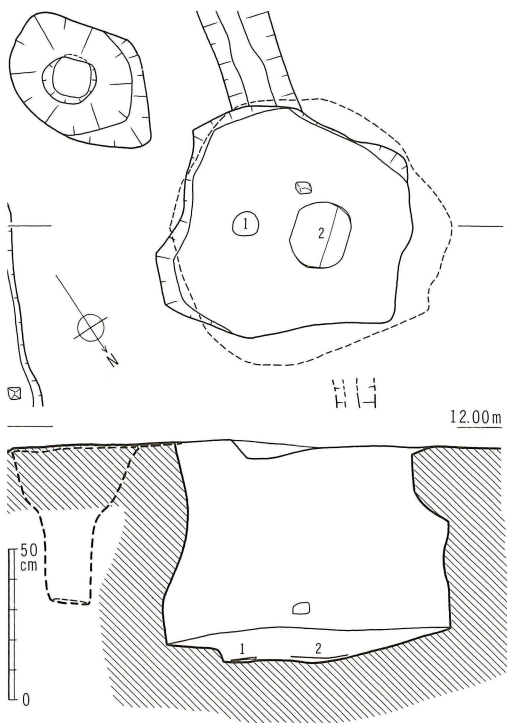
少の有機物を含むほか、土師質土器小皿・同皿片 8 個、木片 1 個、モモの核 1 個などが出土している。

18号土坑 (図版第30、第53図)

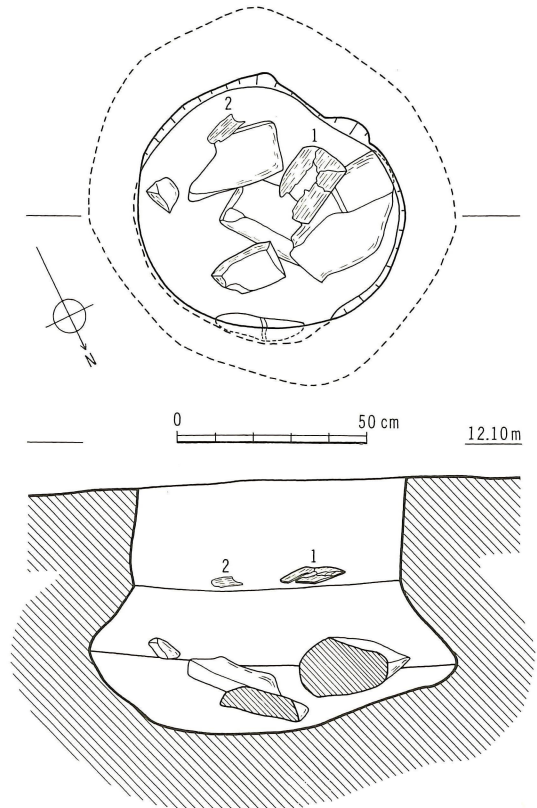
Ⅹ号遺構群の西辺に位置し、7号溝と重複する。多角柱状を呈する井戸である。上端の径75～77cm、下端の径88～93cm、深さ71cmを測る。坑底は湧水層に達し、壁面下部は崩落のため裾広がりとなっている。埋土に多少の有機物を含むほか、下層から礫 1 個、坑底から曲物容器底板 1 枚 (第 53 図 1)、不明板材 1 枚 (同図 2) が出土している。

19号土坑 (図版第30、第54図)

Ⅹ号遺構群の南部で、1号掘立柱塼の南端に位置する。円筒形の井戸である。上端の径61～72cm、下端の径89～102cm、深さ67cmを測る。坑底は湧



第 53 図 18 号土坑実測図 (縮尺 1/25)



第 54 図 19 号土坑実測図 (縮尺 1/20)